高知県香美郡香我美町

稗 地 遺 跡

山南川河川改修工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財 センター

稗 地 遺 跡

序文

平成3年度に実施しました、香美郡香我美町「稗地遺跡」の調査報告 書を刊行する運びとなりました。

平成3年4月に埋蔵文化財の調査・研究及び普及啓蒙についての中心機関となるべく埋蔵文化財センターが開設されましたが、県民の皆様方の温かいご理解とご協力により、その運営もようやく軌道に乗ってまいりました。県民共有の文化的財産であります埋蔵文化財の保護体制を充実させることにより、県民文化の振興により一層尽力する所存でございますので今後ともご協力の程よろしくお願い申しあげます。

今回の調査は、山南川水系河川改修工事に先立ち、(財)高知県文化 財団埋蔵文化財センターが高知県南国土木事務所の委託を受け、遺跡の 記録保存のため実施したものです。

本書が文化財の研究及び保護の一助としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査に際しご協力、ご援助いただきました高知県南国土木事務所並びに高知県教育委員会、香我美町教育委員会、地元稗地地区の皆様方をはじめ、調査関係者各位に厚くお礼申しあげます。

平成5年3月

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 所 長 **小橋** 一民

例 言

- 1. 本書は、山南川河川改修工事に伴う稗地遺跡(香我美町上分字稗地に所在)の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県の委託を受け、平成3年 10月28日~11月28日の間に実施した。整理作業は平成4年度に実施した。
- 3. 発掘調査体制は以下の通りである。

●調 査 員

松田知彦(高知県教育委員会文化振興課 社会教育主事)

出原恵三 (同 主 幹)

●事務担当

山崎 浩((財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 事業課長)

三浦康寛 (戸 主 幹)

●調査協力

藤方正治(

近森泰子 (同調査員)

- 4. 本書の執筆・編集は松田知彦が行った。
- 5. 遺物整理・図面作製等の作業においては竹村延子・大原喜子・山中美代子・宮地佐枝・矢野 雅氏の協力を得た。

調査員)

- 6. 本報告書作製にあたっては、出原恵三氏(高知県教委)をはじめ(財)高知県文化財団埋蔵 文化財センターの各調査員の方々から貴重な助言、教示を得た。記して深く感謝の意を表した い。
- 7. 発掘作業においては、地元稗地地区を中心とする下記の方々の協力を得ることができた。記して深く感謝の意を表したい。

 佐野
 宣重
 貞岡
 重通
 岩河美枝子
 岩河 照子
 十万
 睦

 吉川
 糸恵
 長崎
 三湖
 水田
 万喜
 久家
 正子
 吉川
 徳子

 別役
 美益
 馬地
 節子

報告書要約

- 1. 遺跡名 稗地遺跡
- 3. 立 地 香我美町東部山南川左岸 標高約22.5m
- 4. 種 類 弥生・古墳時代、中世(集落跡)
- 5. 調査主体 (財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
- 6. 調査契機 山南川河川改修工事
- 7. 調査期間 平成3年10月28日~11月28日
- 8. 調査面積 500 m²
- 9. 検出遺構 〔弥生時代後期~古墳時代初頭〕ST6棟 SK1基 〔中世〕SK4基、SD2条、P3基 〔時期不明〕SA1列、SD1条、P多数
- 10. 出土遺物 弥生土器、古式土師器、土師質土器、青磁、瓦質土器、鉄鏃、鉄製穂摘具
- 11. 内容要約 今次調査では弥生後期~古墳時代の初頭の竪穴住居址を6棟(円形3・方形3)検出した。そのうち円形住居址と方形2棟にベッド部を有する。また一括資料としてSK3、中世の一括資料としてP7から良好な遺物が得られた。鉄製穂摘具をはじめ、鉄器資料の豊富さも特記できよう。

目 次

第Ⅰ章	調査に至る経過]
第Ⅱ章	稗地遺跡の位置と環境3
第Ⅲ章	調査区の概要及び調査方法5
1	調査区の概要5
2	2 調査方法5
第Ⅳ章	検出遺構と遺物9
1	弥生・古墳時代の遺構と遺物9
2	2 中世の遺構と遺物25
3	3 その他の遺構と遺物26
第Ⅴ章	まとめ29
1	
2	2

図 版 目 次

第1図:稗地遺跡の位置と周辺の遺跡
第2図:発掘調査区位置図
第3図:稗地遺跡検出遺構全体図
第4図:ST1と出土遺物10
第 5 図:ST 1 出土遺物1
第6図:ST 2 と出土遺物12
第7図:ST3 と出土遺物1
第 8 図:ST 3 出土遺物1:
第 9 図:ST 3 出土遺物10
第10図:ST 4 と出土遺物
第11図:ST 4 出土遺物
第12図:ST 5 と出土遺物20
第13図:ST 5 出土遺物2
第14図:ST 6 と出土遺物22
第15図:ST 6 出土遺物2
第16図:SK 1~ SK 5 と SK 1・SK 3 出土遺物24
第17図:P7・SD2 と P5~ P7・SD2・SD3 出土遺物27
第18図:SA I と包含層出土遺物28

写真図版目次

写真1:発掘調査区全景・発掘調査風景 (ST4)4
写真 2 :ST 1完掘状態・ST 1ベット部セクション
写真 3 :ST 2検出状態・ST 3検出状態
写真 4 :ST 3完掘状態・ST 3内SD 2セクション
写真 5 : ST 3遺物出土状態4:
写真 6 :ST 4完掘状態・ST 4遺物出土状態
写真 7 : ST 5 完掘状態 · ST 5 遺物出土状態
写真 8 : ST 5遺物出土状態48
写真 9 :ST 6完掘状態・ST 6北壁セクション
写真10:SD2東壁セクション・SK 1完掘状態56
写真11:SK 3遺物出土状態·P 5遺物出土状態5
写真12:P7遺物出土状態·包含層遺物出土状態52
写真13:ST 1出土遺物55
写真14:ST 3出土遺物
写真15:ST 3出土遺物55
写真16:ST 4·5出土遺物
写真17:ST5·6、SK1、SD3、包含層出土遺物57
写真18:SK 3出土遺物58
写真19:P7出土遺物
写真20:ST 3出土石器(石包丁·砥石)60
写真21:ST3·5出土鉄器(鉄製穂摘具·鉄鏃)6

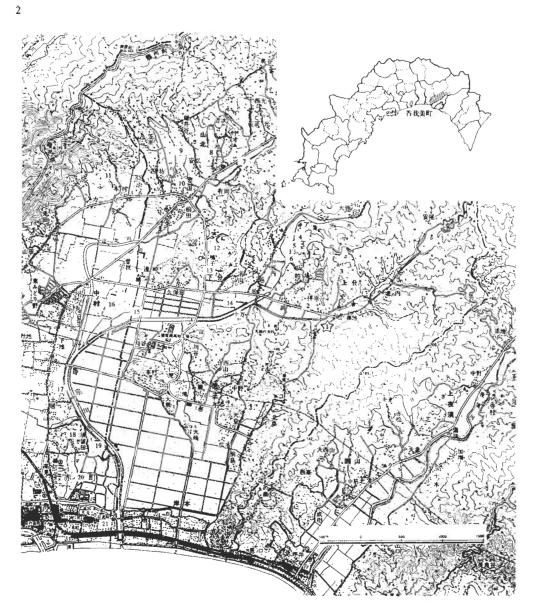
第 I 章 調査に至る経過

香宗川中小河川改修関連工事は、農業用導水路の系統的整備によって農地の効率利用を図り 又、治水も合わせ目的として計画が進められた。その一環として香宗川の支流である山南川河川 改修工事が計画されたが、当該事業計画区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地である稗地遺跡が存 在し、弥生時代~古墳時代の遺物が確認されていた。すでに、稗地遺跡の周辺においては拝原遺 跡や十万遺跡など当該期の遺跡が立地しており、稗地遺跡も山南川流域に展開する一連の集落遺 跡となることが考えられ、当地域の歴史を明らかにするうえで重要な位置を占める可能性があ る。当該工事が計画通り実施されれば地下の埋蔵文化財も甚大な影響を受ける為に、文化財保護部 局である高知県教育委員会及び香我美町教育委員会は、高知県南国土木事務所と協議を行い、その 結果遺跡内の工事対象区域500㎡について記録保存のための全面発掘を実施することになった。

発掘調査業務は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当し、平成3年10月28日~ 11月28日に行われた。



稗地地区の集落と発掘調査風景



1	稗地遺跡	弥生・古墳・中世	1 2	棒ヶ谷遺跡	弥生	ア	八王子神社古墳	古墳
2	拝原 〃	縄文・弥生・古墳	1 3	鳴呼 /	古墳~平安	イ	野神 〃	"
3	的場 〃	弥生	1 4	十万 〃	弥生~中世	ゥ	棒ヶ谷 〃	"
4	幅山 〃	*	1 5	下分遠崎〃	弥生	エ	鳴呼一号墳	"
5	中幅 🥠	弥生・古墳	1 6	曽我 ク	弥生~中世	オ	池の本古墳	"
6	下幅 〃	"	1 7	東野土居〃	古墳~平安	カ	大崎山 〃	"
7	立花 〃	古墳	1 8	ハザマ 〃	弥生~中世	キ	ノツゴ 〃	"
8	宮の前ヶ	弥生・古墳	1 9	大東 〃	古墳~平安	ク	土居山 〃	"
9	宮の西ヶ	"	2 0	御所の前ヶ	弥生~中世	ケ	加治ヶ山 〃	"
1 0	岡の芝〃	古墳~中世	2 1	江見 🥠	古墳	コ	螢野 〃	"
1 1	野市本村。	弥生				サ	徳善天皇 /	1

第1図 稗地遺跡の位置と周辺の遺跡(弥生~古墳)

第Ⅱ章 稗地遺跡の位置と環境

稗地遺跡は、香美郡香我美町上分字稗地に所在する。香我美町は、高知県の穀倉地帯である高知平野の東端に位置していて、北方は物部・香北・土佐山田、南方は夜須・芸西、東側は安芸、また西側は野市・赤岡の各市町村と接している。岸本の集落南側は、黒潮洗う土佐湾である。町のほぼ中央部を香宗川が南西へ向かって流れ下り、下流には氾濫原性の低地を造っている。3系統の主要山系は北東方向に向かって次第に高度を増しており、地質時代の第三紀末から第四紀にかけての地盤隆起運動に際して、北東側の山地がより大きく隆起し、南西部の土佐湾側がそれに引きずられて隆起した結果であろうとされている。(1)

遺跡所在地は、香宗川の支流である山南川左岸の氾濫原性の低地から低位段丘に続く平坦面上に位置しており、香我美町役場(北緯33度34分00秒・東経133度44分49秒)の東南東約1.7km、海岸線から北方約3.2kmの距離にあり、標高は22.5m前後である。

当遺跡周辺には、高知平野の弥生時代~古墳時代を語る数多くの遺跡が存在している。中でも最も注目されるのは、当遺跡の西方約1.5kmにある下分遠崎遺跡である。高知県中部地域には、古物部川が形成した自然堤防上に営まれた拠点的な大集落である田村遺跡群があるが、この下分遠崎遺跡も、分村によって生まれた集落である。田村遺跡群は、弥生時代の初期の段階から稲作文化を受容し、高知県中部弥生社会の中で終始その中心となった集落として知られているが、木製品が出土しなかった。この下分遠崎遺跡がその不足・不十分な遺物を補う形となった。木製品が出土したのは弥生中期の遺構検出面で、多量の自然木とともに、農耕具・工具・祭器などの完形品のほかに、加工痕をもった板状・柄状・棒状の木製品が出土した。田村遺跡群から分村し、定着した集落についての重要な資料を含んだ遺跡である。(2)

十万遺跡からは縄文時代晩期の貯蔵穴に伴って黒色磨研の浅鉢が出土しており、その他弥生前期・中期前葉の遺物も散見される。弥生中期後半になると丘陵上に的場遺跡や棒ヶ谷遺跡が営まれるが、具体的な状況は不明な点が多い。弥生時代後期になると、香宗川や山北川沿の河谷平野に多くの小規模な集落が出現し、丘陵斜面からは壺棺墓が発見されている。古墳時代になると、中期には徳善天皇古墳が築かれ、続く後期には周辺一帯で横穴式石室を持つ古墳が数基確認されている。7世紀になると徳王子古窯跡群で瓦・須恵器が焼かれるようになり、このような地域的発展を背景として奈良・平安時代に至ると、十万遺跡や曽我遺跡のように豪族館や郡衙級の建物群が出現するようになる。(3)

稗地遺跡は、このような地域的発展の中で、弥生時代後期~古墳時代前期の小集落がいかに営まれたかという問題を提示してくれる遺跡として位置づけることができよう。



第2図 発掘調査区位置図

第Ⅲ章 調査区の概要及び調査方法

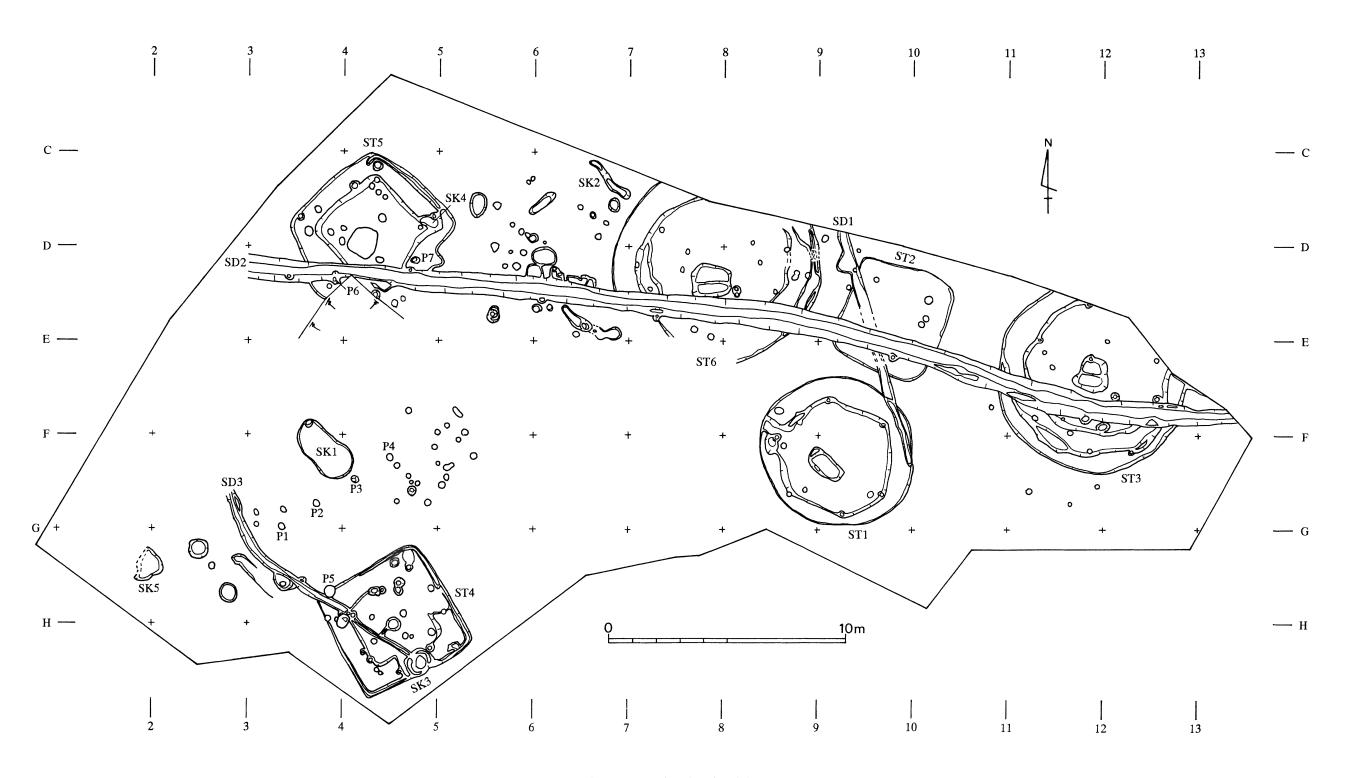
1 調査区の概要

調査の対象となった面積は約500㎡で、東西方向に長軸をもつ台形状の調査区である。調査区 北側はすでに河川改修工事のため断面が垂直に切られており、西側は幅員2~3mの農道である。 他方向は水田、畑地と接している。調査区全面はほぼ平坦であり、調査区内の比高差は少ない。 また、調査区は水田、畑地として利用されてきており、ハウス栽培に使われていた部分もある。 なお調査区西側の一部は耕作あるいは建造物によってかなり深くまで撹乱を受けており、遺構・ 遺物の検出ができなかった。

2 調査方法

まず調査区東側について厚さ10~20cmの耕作土を重機で削ぎ取った後、人力で精査したところ、耕作土直下より遺構を認めることができた。この段階で遺構が調査区全面に広がっていると判断し、全面発掘調査を実施することにした。

遺構の実測及び遺物取り上げについては、磁北にあわせて任意に4m毎に測量杭を設け、東西 方向に数字、南北方向にアルファベットを打ってグリッド番号とした。



第3図 稗地遺跡検出遺構全体図

第Ⅳ章 検出遺構と遺物

1 弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

ST1 (第4・5図)

調査区の中央やや東よりに位置し、ほぼ円形の平面プランを持つ住居址である。直径 $6.5\,\mathrm{m}$ 、床面までの深さは $20\,\mathrm{cm}$ 前後である。東北の隅を $\mathrm{SD}\,\mathrm{1}$ により南北方向に切られている。壁面にそって幅 $0.3\sim1.1\,\mathrm{m}$ 、高さ $5\sim15\,\mathrm{cm}$ のベッド状遺構が伴っている。ベッドは六角形を呈し、北西方向でとぎれている。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、 $\Pi\cdot\Pi$ 層がベッド部となっている。ベッドは、基底に地山部分を残し、その後版築構法により拡張するという技法でつくられている。住居に伴う柱穴は $\mathrm{P1}\sim\mathrm{P3}\cdot\mathrm{P7}\cdot\mathrm{P8}$ が考えられ五角形を呈する。 $\mathrm{P1}-\mathrm{P2}$ 間は $2.5\,\mathrm{m}$ 、 $\mathrm{P2}-\mathrm{P3}$ は3 m である。各ピットの規模は表 $-\mathrm{1}$ に示した。中央ピットは住居址の中心より南側に寄っており、 $168\times92\,\mathrm{cm}$ の楕円状をなし、深さは $20\,\mathrm{cm}$ である。部分的に段状をなしており断面は舟底状を呈す。底部には炭化物が堆積している。また、中央ピット脇には焼土が薄く堆積している。

遺物は、住居址の規模の割には多くない。器種別には壺と鉢が多く甕が少ない。1~6はラッパ 状に強く外反する壺の口縁部である。1の口唇部は上に摘み上げ、内外面共にナデている。4~6 は口唇部に装飾を施している。4は貝殻腹縁による押引文、5は貝殻腹縁による圧痕文、6はハケ 状工具による波状文を巡らし、条線は3条である。

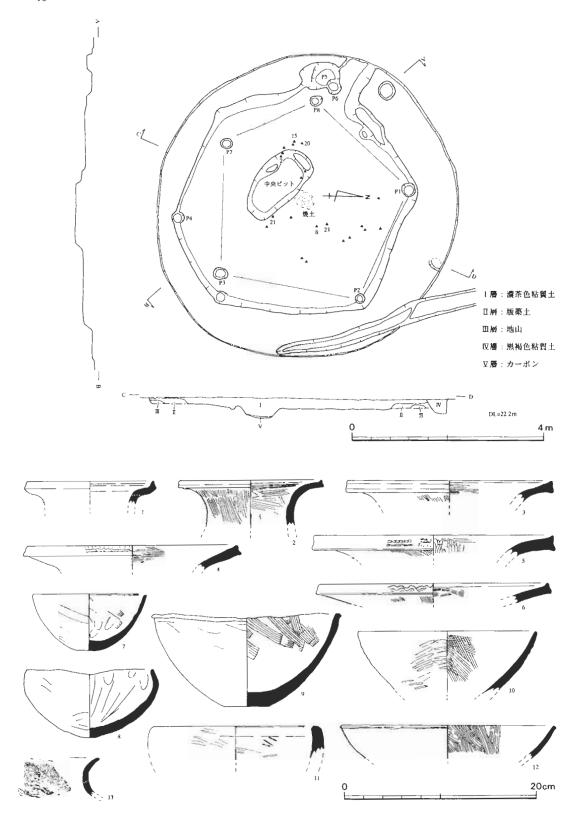
甕は確認できるものが一点のみである。13は口縁部が外反し、内外面共ハケ調整を施す。

鉢は6点出土している。外面はナデ調整をもつものが多い。 $7 \cdot 8$ は丸底の小型の鉢である。9は平底の中型の鉢。 $10 \sim 12$ は中型の浅い鉢と思われる。

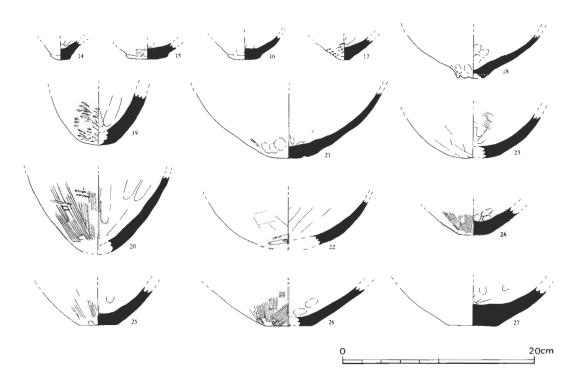
これらの他壺・甕の底部が14点出土している。底部の形態は、突出した平底(14~16・18)4点、平底(17・19・24~27)6点、丸底(20~23)4点である。ST1は弥生時代後期に属する。

ピット No.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	28×24	48
2	径 20	38
3	径 22	38
4	径 22	31
5	40×32	28
6	30×28	41
7	24×20	18
8	26×21	15
中央ピット	168×92	20

第1表 ST1 柱穴規模



第4図 ST1と出土遺物



第5図 ST1と出土遺物

ST2 (第6図)

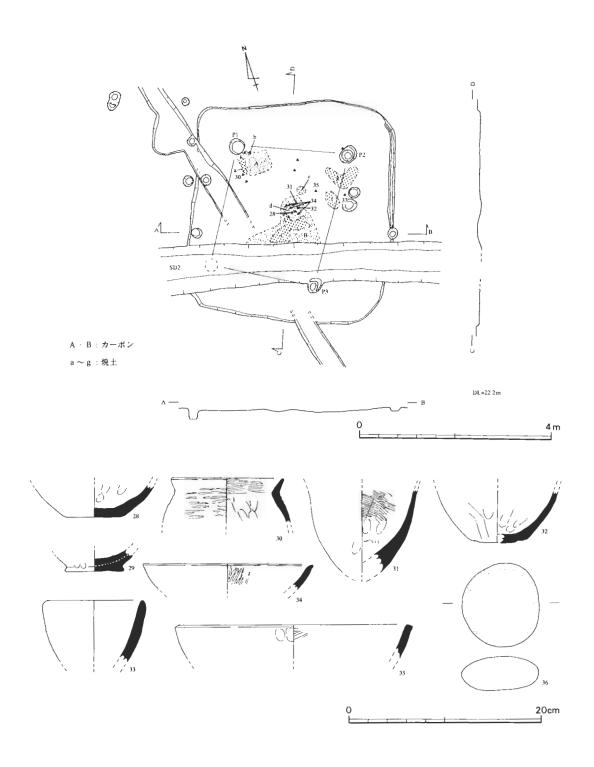
ST1の北側に位置し、一辺4.5 m 前後の方形の竪穴住居である。東の2つのコーナーは隅丸方形をなし、北西側のコーナーはやや角張っている。南西はSD2に切られており形態不明である。また北西から南東方向にかけてはSD1により切られている。壁の立ち上がりは5~10 cm であり非常に浅い。床面中央部に5 cm の比高差をもつマウンドがあり、それに続いて中央ピットと考えられる凹みが存在するが、形態ははっきりしない。中央マウンド部及び凹み部には広範囲にわた

りカーボンと焼土が残存し、周辺部にも広がる。 位置は第6図、規模は表-2に示した。主柱穴は P1~P3を想定することができる。4本柱で本来 はSD2に切られている位置に柱穴が存在したも のと考えられる。柱穴間距離はP1-P2が2.3 m、P2-P3が2.8mである。各々の規模はP1が 31×30cm、深さ22cm、P2は段掘りになってお り39×29cm、深さ51cm、P3は24×20cm、深さ 24cmである。

出土遺物は図示できるものが少ない。28・29 は壺底部である。28は平底から内湾気味に立ちあ

第2表 ST2 カーボン及び焼土規模

種別		長軸×短軸 (cm)
カーボン	A	60×54
"	В	158×100
焼 土	a	35×18
"	b	8× 7
"	c	85×55
"	d	15× 9
"	e	19×18
"	f	41×26
"	g	60×57



第6図 ST2と出土遺物

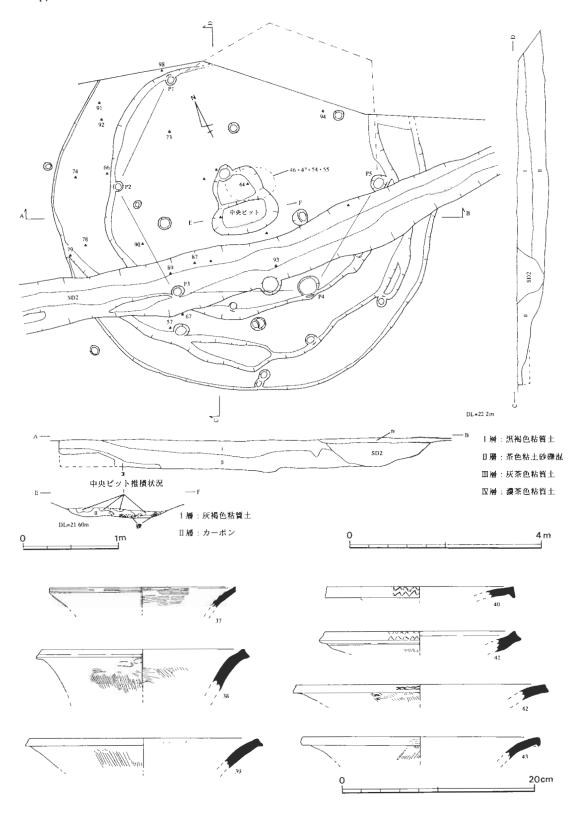
がり、内面にへう磨きが見られる。29の底部は断面台形状を呈し外面に指頭圧痕、内面にナデ調整を施す。30~32は甕である。30は口縁部が「く」の字状に外反し、内面に稜をなす。外面は横方向の叩き調整を施す。31は胴部外面ナデ調整、内面ハケ調整を施し、指頭圧痕が顕著に見られる。32は平底の底部を持つ。33~35は鉢である。33は内外面共にナデ調整を施す。34は内面がヘラ磨きされた浅い鉢である。36は磨石である。ST2の時期決定は難しいが、住居址のプラン、出土土器から一応古墳時代初頭と判断した。

ST3 (第7~9図)

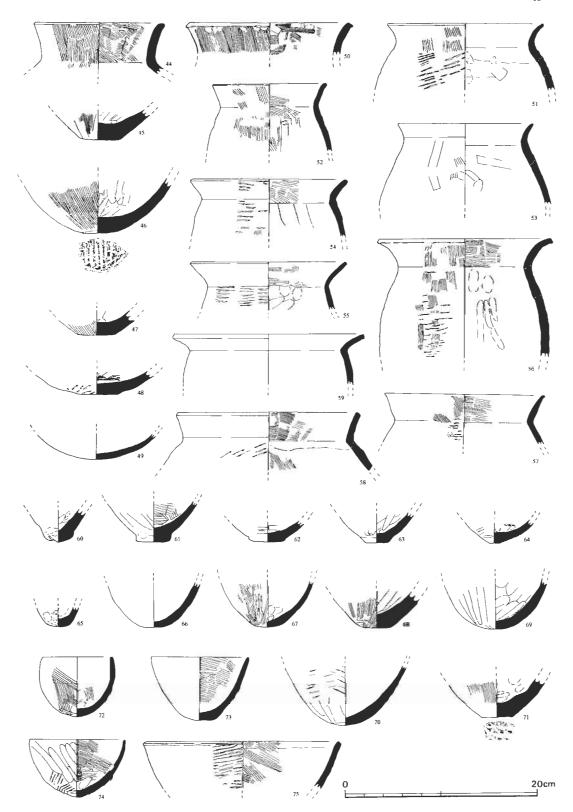
遺物は総数約3,000点が出土している。器種別では甕41%、壺27%、鉢17%、高杯15%の比率となっており、甕に河内からの搬入品が一点含まれる。壺には2つのタイプがある。(a)口縁部が漏斗状に強く外反するもの。(39~43)(b)口縁部がゆるやかに外反しながら立ち上がるもの。(38・44) 40は口唇部を拡張し波状文を施す。条線は2条が確認できる。44は外面に縦方向の丁寧なハケ調整を施す。内面は右下りのハケ調整。46は底部を叩いている。49は球状の胴部を持つ壺の底部と考えられる。

ピット No.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	径 22	34
2	径 20	42
3	28×24	44
4	46×40	49
5	34×30	41
中央ピット	136×104	24

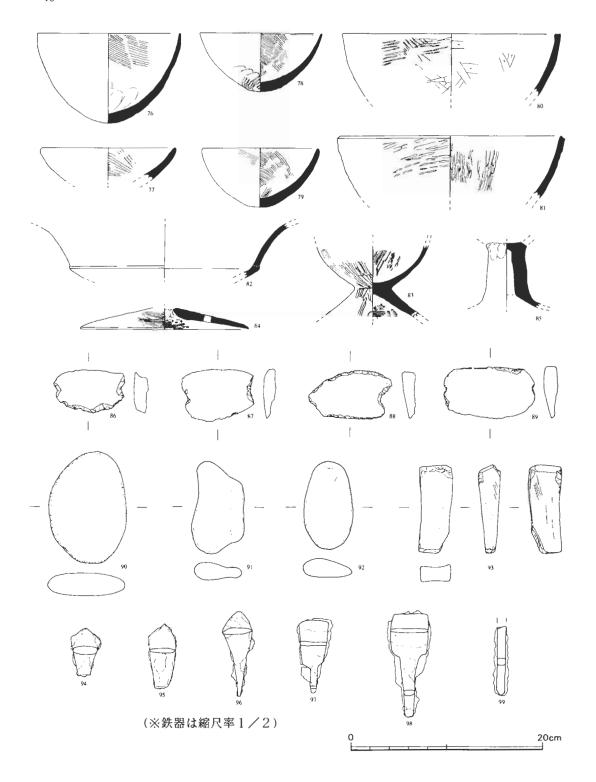
第3表 ST3 柱穴規模



第7図 ST3と出土遺物



第8図 ST3と出土遺物



第9図 ST3出土遺物

37・50~59は甕である。37の口縁部は僅かにラッパ状に外反し、口縁端部は上方へ摘み上げている。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。胎土中に角閃石及び雲母片を含み濃褐色に発色する河内平野からの搬入品である。在地系の甕はすべて口縁部が「く」の字状に外反し、

(a) 口縁屈曲部内面に稜を有するもの。 $(57\cdot 59)$ (b) 屈曲部内面が丸味を帯びて外反するもの。 $(51\sim 56\cdot 58)$ があるが、後者が多い。外面は叩き調整のみのものと叩き調整後ハケ調整を施すもが半々の比率でみられる。内面はハケあるいはナデている。 $60\sim 64\cdot 66\sim 71$ は底部であるが、形態は(a) 突出した平底。 $(60\sim 64)$ (b) 平底。 $(66\sim 68\cdot 71)$ (c) 丸底。 $(69\cdot 70)$ と様々である。71 は底部外面を叩いている。65 は小型の手捏ね土器で内面に指頭圧痕が顕著である。

72~81は鉢である。鉢は(a) 半球形の椀状を呈するもの。(72・74・76・78・79) が多く、(b) コップ状のもの。(73) (c) 浅い皿状のもの。(77) がある。底部は丸底のものが圧倒的に多い。体部はハケ及びナデ調整を施すものと一部叩き調整を残すものがある。(74・75・78・80・81) 81は内面を細くヘラ磨きしている。

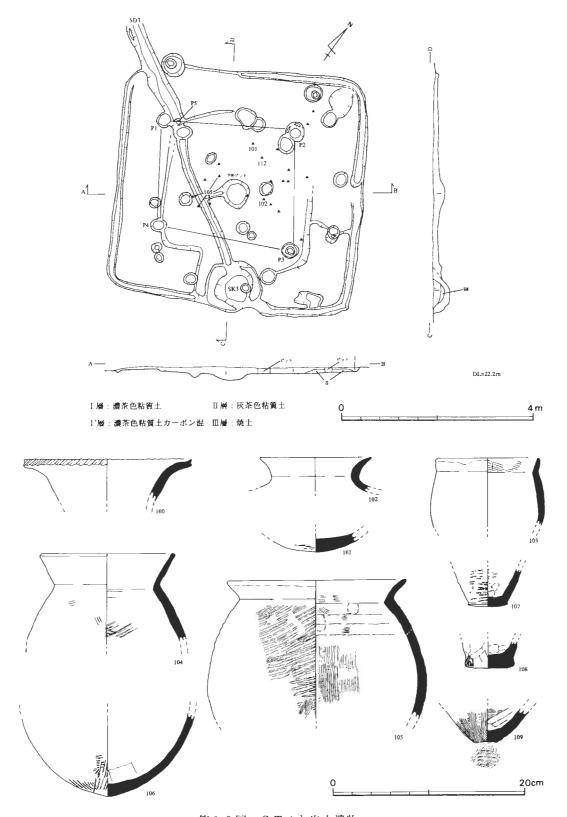
高杯は完形品には恵まれていない。82 は内外面共丁寧なナデ調整を施した杯部である。83 の杯部は半球形状を呈する。杯部は全面へラ磨きを施す。84 は大きく裾が広がり、4 孔を穿つと思われる。胎土中に微量ながら雲母片を含み、搬入品の可能性がある。85 は磨耗が激しいが高杯脚部である。杯部との接合部には指頭圧痕を認める。

石器は8点出土した。 $86 \sim 89$ は打製の石庖丁である。孔はなく、かわりに88を除き両端に切りこみがある。 $90 \sim 92$ は磨石である。93 は砥石で、断面長方形を呈し、長辺側の中央部は二面共凹む。

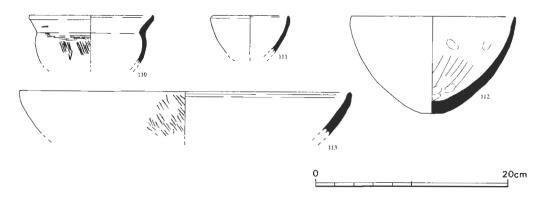
 $94 \sim 98$ は鉄鏃で、鏃身部の形態は圭頭形($94 \sim 96$)、方頭形($97 \cdot 98$)である。99 は方形の断面をもつ鉄鏃茎部であると見られる。ST3 は弥生時代後期に属する。

ST4 (第10・11図)

一辺5mの方形住居址で、床面までの深さは10cmと浅い。北西の隅から南東方向へSD3に切られまた南東壁際をSK3によって切られている。ST4もベッド状遺構をもつ。ベッド部は壁に沿って南西壁-北東壁を巡るが、北西側では消滅している。「コ」の字状の平面プランを有するタイプと考えられる。ベッド部の高さは5~8 cm、幅は80cm前後である。埋土は I 層で、II 層が東側ベッド部分を構成している。西側ベッド部は地山を削り出して作っており、東西で技法が異なる。また北西側の一部を除き、壁に沿って内側に幅10~20 cm、深さ10 cm 内外の壁溝を巡らしている。主柱穴は規模と深さからP1~P4が想定される。各々の規模はP1(30×28 cm 深さ50 cm)、P2(40×37 cm 深さ46 cm)、P3(32×31 cm 深さ41 cm)、P4(32×30 cm 深さ46 cm)である。柱間距離はP1-P2(2.7 m)、P2-P3(2.5 m)、P3-P4(2.8 m)、P4-P1(2.2 m)である。なお、P3 には径20 cm の柱痕跡を認めることができる。中央ピットは住居のほぼ中央にあり、不整円形を呈する。規模は62×61 cm、床面からの深さ14 cm で舟底型の断面を持つ。



第10図 ST4と出土遺物



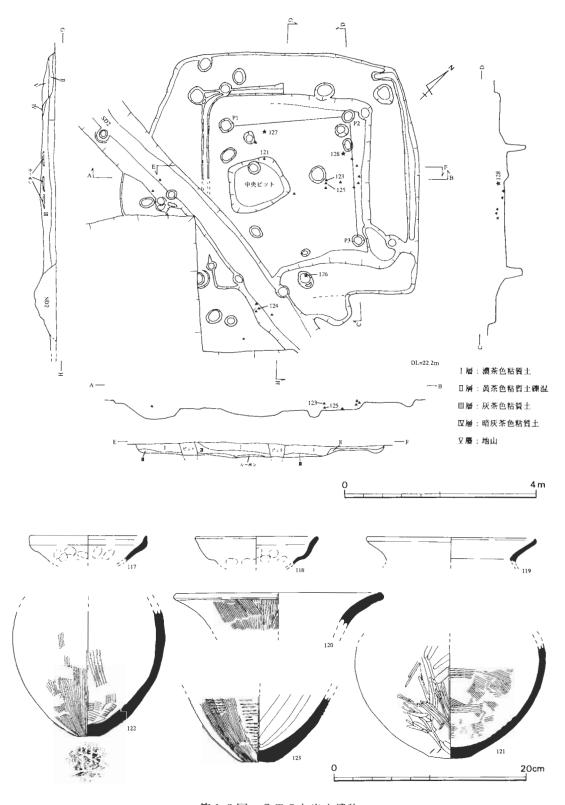
第11図 ST4出土遺物

遺物は、細片も含め総数約450点出土しているが図示できるものは少ない。100は壺の口縁部である。ラッパ状に外反し、口縁端部を上へ摘み上げている。口唇部に幅4~5mmで左下りの凹線を周囲にめぐらしている。101は壺の底部である。102~105は甕である。甕はすべて口縁部が「く」の字状に外反する。102・103は屈曲部が丸みを帯びている。104・105は内面稜をなす。外面は叩き調整後ナデて消しているもの(103・104)、太い叩き調整痕をそのまま残すもの(105)がある。105は胴部上半に粘土帯接合痕跡が認められる。106~109の底部は106を除き平底で、109は底部外面を叩いている。110はいわゆる小型丸底壺である。P5より出土した。球形の胴部から口縁部がゆるく外反し、内面に稜を持つ。頸部外面は横方向、胴部外面は右下りのヘラ磨きを施す。内面は強い横ナデ調整を施す。P5はST4に伴うピットではない可能性がある。111・112は半球形の椀状を呈す鉢である。113は浅い皿状の大型の鉢になると考えられる。ST4の所属時期はその形態から古墳時代に入る可能性もあるが、出土土器の観察から一応弥生時代後期と判断した。

ST5 (第12・13図)

調査区西端に位置し、1 辺4.5 m 前後の方形住居址で床面からの立ち上がりは約30 cm である。西側のコーナーは鈍角をなす。南東辺は後世の撹乱により確認できない。南側 1/3 を SD 2 により切られており、また SD 2 より南側は撹乱のため観察できない。ST 5 もベッド状遺構を伴っている。壁に沿って高さ 20 cm 前後、幅 $0.9 \sim 1.0$ m の規模を持ち、ST 1 と同様に地山を削り出した上に版築で拡張するという技法を持っている。埋土は $I \sim IV$ 層で II 層がベッド部となっている。北東側ではベッド部を構成する II 層の下に壁溝が存在することから 2 時期を想定しなければならないのかも知れない。床面には多数のピットが存在するが、主柱穴は $P1 \sim P3$ と考えられ、各々の柱間距離は 2.6 m である。他のピットの性格を明らかにすることはできない。中央ピットは住居の中央よりやや南側に位置し、台形状の平面プランを有する。長軸×短軸は 1.17×108 cm、床面からの深さ 1.7 cm ∞ 、西側の壁際に径 2.4 cm のピットを伴う。断面は舟底型である。

遺物は I 層を中心として細片が数多く出土しているが、図示できるものは僅かである。120 は 口縁部がラッパ状に外反する壺である。外面に丁寧な右下りのハケ調整を施す。121 は球形の胴



第12図 ST5と出土遺物



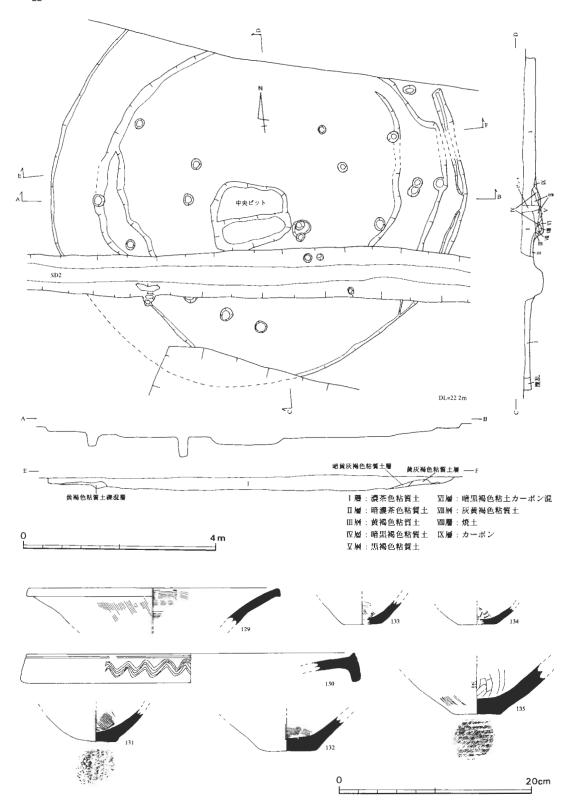
第13図 ST5出土遺物

部を持つ壺であり外面はヘラ磨きされている。119 は搬入品の甕である。口縁端部を上に摘み口唇部は丸くおさめている。頸部内面に鋭い稜をなし、全体丁寧なナデ調整を施す。河内平野の土器であり、II層から出土した。122・123 は甕の底部で、122 は底部外面を叩いている。117・118 は半球形の体部に二重口縁がつく鉢で指頭圧痕が顕著である。124 は杯形の手捏土器で、胴部下端を指で絞っている。125 は高杯の脚であり、4 孔を外面から穿つ。ST 5 からは鉄器が 3 点出土している。126 は断面方形の鏃茎であろう。127 は鏃身であるが先端を欠いている。ST 3 出土の鉄鏃に同タイプのものが含まれる。128 は鉄製穂摘具である。長さ 7.4 cm、幅 2.7 cm、厚さ 3 ~ 4 mm あり、両端を丸く折り返したもので完全な形を保っている。ST 5 の時期は出土土器から弥生後期末~古墳初頭の中で考えなければならない。

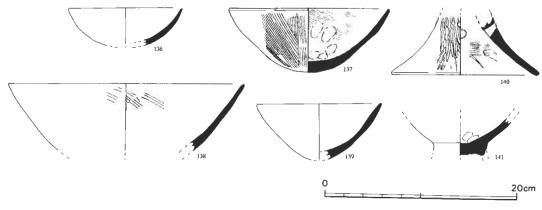
ST6 (第14·15図)

北側約1/4が調査区外に出ており、南半はSD2により東西に切られ、南端は現代の撹乱を受けているが、直径8.5 m 前後のほぼ円形を呈する大型の住居址である。床から検出面までの深さは10~26 cm で、SD2より南側で浅い。ST6も壁面に沿ってベッド状遺構を持つ。幅1.0~1.2 m、高さ15 cm 前後であるが、SD2より南側、及び東壁の一部では確認できない。中央ピット部を除き埋土は I 層で、EF ラインの II 層目がベッド部を構成する。ベッドの構築技法は ST1・ST5と同様に地山の基底部の上に版築で拡張するというタイプである。主柱穴についてはSD2に切られていることもあり明確にできない。中央ピットは住居の中央よりやや南寄りと考えられ、四隅が丸くなった不整四角形を呈している。断面は東西方向が舟底型、南北方向は段をなしており、南側半分が低い。ピット埋土は南側部分の底にカーボンを含有した層と焼土が重なり、その上を粘質土が覆う。さらにその上にカーボンを認めることができる。これは、最初中央ピットの南半だけを使用していたが、なんらかの理由で北半を拡張し使用した証拠である。

遺物は細片を含め総数1,200点余が出土しているが、図示し得たのは13点と少ない。壺は2点出土している。129の口縁部は外反し、端部は下方に肥厚して口唇部は外傾する面をなす。内外面共ハケ調整。130は装飾された口縁部である。口唇部に波状文を施し条線は4条。131~135の底部はすべて平底である。131は底部外面に木葉の圧痕を残す。135は底部外面を叩いている。



第14図 ST6と出土遺物



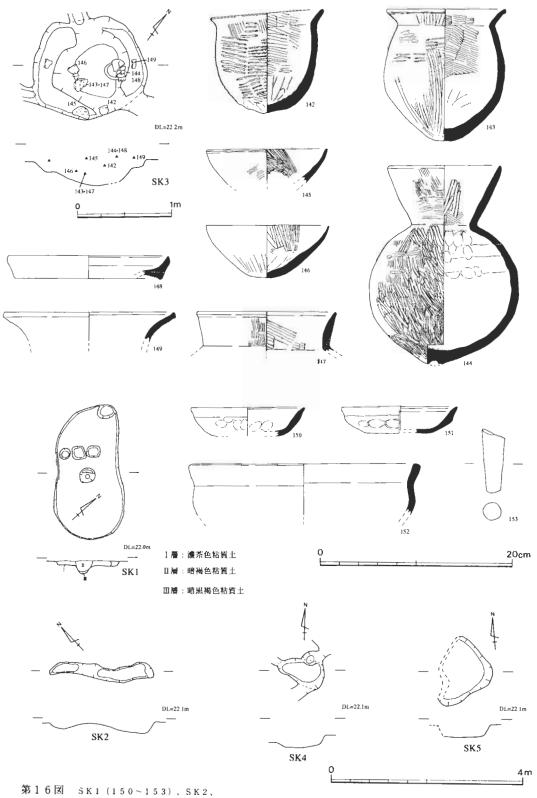
第15図 ST6出土遺物

136~139は鉢で138を除き丸底で、内湾あるいは内湾気味に立ちあがっている。140は高杯の脚部で裾が「ハ」の字状に開く。4孔を穿つと思われる。外面丁寧な縦方向のヘラ磨きを施す。141は「ハ」の字状に張り出す脚部を有すると思われる高杯である。脚部と杯部の接合部周囲に粘土帯を張り付けヘラ状工具で押えている。外面丁寧なナデ調整を施す。ST6は弥生時代後期に属する。

(2) 土坑

SK3 (第16図)

ST4の南東壁内側にあり、ST4を切っている。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ35cmの隅丸方形 の土坑である。北側と南側の一部を除き2段に掘り込まれており、東壁は急傾斜しているが西壁 はゆるやかに立ち上がる。北壁をSD3に切られている。埋土はⅢ層であるが、最下層はST4のI 層と内眼の観察では差異を認めない。その上に焼土層、最上層にカーボンが混入した粘質土層が 共にレンズ状に堆積している。遺物は壁および床面に貼り付いた形で完形品を含み10数点の土器 が出土した。142は小型の甕である。口縁部まで叩き出しており、口縁部外面は叩いた後縦方向 のハケ調整。胴部は外面横方向の太い叩き調整、内面右下りおよび横位のハケ調整を施す。丸底 で底部外面に大きな黒斑がある。143 も甕である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部外面は 叩いた後ハケで消している。胴部内面上半は右下りのハケ、下半はヘラ削り後ナデている。144 は直口壼である。球形の胴部を持ち、底部は充塡粘土が剝離しているが尖底になる。胴部外面は 縦および右下がりのハケ調整と縦および右下りの丁寧なヘラ磨きをしている。体部上半内面に粘 土帯の単位(幅1.5~2.0 cm)を明瞭に見ることができる。145・146 は鉢である。共に内湾して立 ち上がり、内面に右下がりのハケ調整を有す。外面はナデている。147 は甕である。内面右下 り、外面縦方向のハケ調整を施す。148は二重口縁の壺であり、水平に近く外反する口縁に粘土 をつぎたしている。149 は甕の口縁部で内外面共横方向の強いナデ調整を施す。SK3はST4を切 っているが、出土土器を見る限りではST4と変わらない。



SK1 (150~153), SK2, SK3 (142~149), SK4, SK5

2 中世の遺構と遺物

(1) 土坑

SK1 (第16図)

ST4の北にあり、長さ2.9 m、最大幅1.0 m、深さは10 cm 内外と浅い。中央部が僅かにくびれた瓢箪形をしている。床面はほぼフラットで壁は垂直に近い。内側に5個の円形または方形のピットがあるが性格は不明である。埋土は I 層であり、埋土中より土師質土器片、瓦質土器片、白磁片合わせて約90点の遺物が出土している。図示できたのは 4 点、150・151 は土師質土器の杯である。共に全体ナデ調整を施し指頭圧痕を認める。底部は観察出来ない。152 は瓦質の鍋、153 は同じく瓦質の鍋の脚である。土坑の性格は不明である。

SK2 (第16図)

ST6の西側に隣接する東西に細長い不整形の土坑である。長軸2.2 m、最大幅35 cm、深さ20 cm あり中央部が最も高く東西に落ち込んでいる。図示できるものはないが、土師質土器片が5点出土した。

SK4 (第16図)

ST5の東側コーナー部に位置する。長軸1.0m、短軸50cm、深さ25cmの卵形の土坑である。 北縁に径30cmのピットを伴う。外面に叩き目を有する弥生土器片が27点と土師質土器片が5点 出土したが図示できるものはない。性格は不明。

SK5 (第16図)

調査区南西端に位置し、南北方向 1.5 m、西側は撹乱のため確認できない。深さ 28 cm、土師質 土器片が数点出土した。

(2) 柱穴

P5 (第17図-156)

瓦質の鍋である。内湾しながら立ち上がり、口縁部「く」の字状に外反する。外面指頭圧痕が 顕著である。

P6 (第17図-157)

高杯の脚である。内部縦穴が貫通している。外面 1/3 ほど剝離しているが、丁寧なナデ調整を施す。弥生土器であるが、他に土師質土器片が2点伴って出土したので、中世のピットと判断した。

P7 (第17図-154 (1) · 154 (2) · 155)

ST 5 の南東壁内側に位置する。長軸 42 cm、短軸 29 cm 一方がやや尖った卵形のピットである。東側が段状に掘り込まれており、深さは約20 cmである。図示できたのは2点。他に土師質土器片6、瓦質土器片2、弥生土器片1、釘状鉄製品1が出土した。154 は青磁碗である。154 (1) と 154 (2) は同一個体であるが互いに接合できる部位にはない。龍泉窯系青磁 I 類に分類される。内湾気味に立ちあがる胴部から口縁部は僅かに外反する。高台は断面四角で高台部畳付およびその内部は露胎である。外面無文、内面および見込には蓮華文を片彫り施文している。12 世紀中葉から13 世紀初頭にかけての出土が多いタイプである。155 は土師質土器の皿である。平底から外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部全体横ナデ調整を施す、底部外面は回転糸切り痕を残す。

(3) 溝状遺構

SD2(第17図-158~163)

調査区全体をほぼ一直線に東西に貫く幅0.9~1.2mの溝で深さ0.5~0.7m、東西で比高差が少ない。ST3・2・6・5の順で東から切っており、西流していたと推測される。埋土はⅢ層からなり下層ほど砂粒が多くなる。細片を含め約1,000点の遺物が出土しているが、約9割は弥生土器片である。158~161は平底の底部である。161は底部外面を叩いている。162は土師質土器の杯である。内湾して立ちあがり、口縁部僅かに外反する。体部内外面共ナデ調整を施す。163は土師質土器の鍋である。頸部に稜を有し、全体ナデ及びハケ調整。

SD3(第17図-164~169)

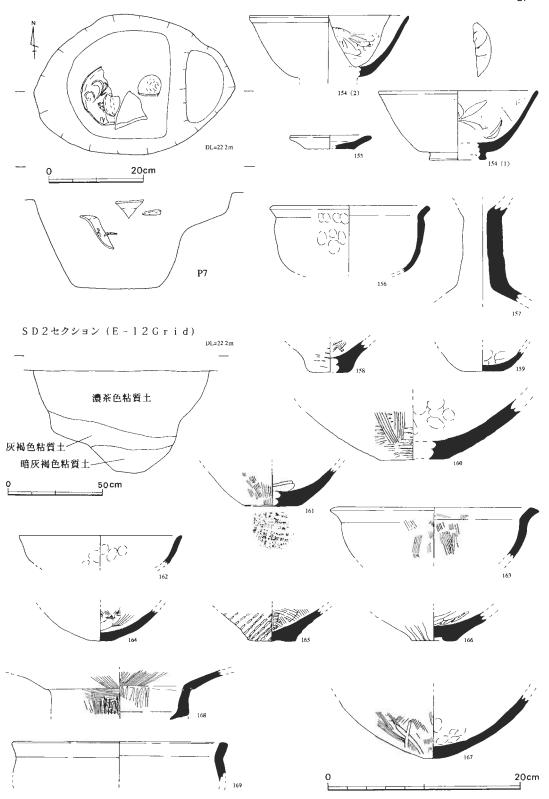
SK3を南端とし、北西方向に伸びる長さ約10m、幅20~40cmの溝で、深さ20cm前後と浅い。弥生土器片を中心として総数約150点の遺物が出土している。164は僅かに突出した平底底部を持つ。165は突出した上げ底状底部から斜上外方に直線的に立ちあがり、胴部外面に左下りの螺旋状叩き目痕を残す。166も上げ底状の底部を持つ。内外面共にヘラ状工具によるナデ調整を施す。167は僅かに残る平底底部を持つ。168は高杯である。内外面共にハケ調整の下地の上にヘラ磨きを施している。169は瓦質土器の鍋である。

3 その他の遺構と遺物

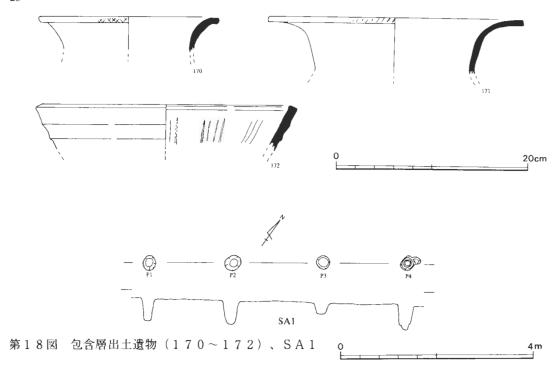
(1) 遺構

SA1 (第18図)

ST4の北西に位置する柵列である。規模は3間(5.46m)でP1よりほぼ北東方向に向かう。柱 穴の平面プランはほぼ円形を呈し、径25~30 cm、深さ17~50 cm で柱間距離は1.78~1.90 m で



第17図 P5 (156)、P6 (157)、P7 (154·155)、SD2 (158~163)、SD3 (164~169)



ある。P4には径約18cmの柱痕跡を認めることができ、また径12cmの小ピットが付属している。出土遺物は少量で図示できるものはなく、所属時期も不明である。

SD1

調査区東側を南北に走る長さ約 $12\,\mathrm{m}$ 、最大幅 $50\,\mathrm{cm}$ の溝。深さ $10\,\mathrm{cm}$ 前後と非常に浅く、ST $1\cdot\mathrm{ST}2$ を切り、中世の溝 SD 2 に切られている。出土遺物は図示できるものはなく、所属時期も不明である。

(2) 遺物 (第18図-170~172)

遺構検出面から出土した遺物を3点図示した。170は壺の口縁である。口唇部に×印状の飾りを巡らしている。171も壺で口縁部が強く外反し、口唇部に飾りを施している。172は瓦質の摺鉢であり、内面に3~4の条線を持つ。

第Ⅴ章 まとめ

稗地遺跡からは、今回比較的小規模な調査であったにもかかわらず弥生時代後期後半~古墳時 代初頭の竪穴住居6棟(ST1~ST6)を中心とする諸遺構ならびに遺物が出土した。以下に遺 構・遺物をまとめてみたい。

1. 遺構

6棟の竪穴住居址は、平面形から2つのタイプに分けることができる。すなわち円形と方形で あり、ST1・3・6が円形に、ST2・4・5が方形に属する。円形住居址は床面の外周部を1段高く したベッド状遺構を有しているところに構造上の第1の特徴を求めることができる。ベッド状遺 構をもつ竪穴住居址は北部九州において弥生時代中期に出現し近畿・瀬戸内地方においては少な いが、南四国では弥生時代後期後半(2世紀末ごろ)にいたって登場し、その後古墳時代初頭ま で多く認められる。(12) ベッド状遺構の構築技法としては、一旦床面まで掘り下げた後粘土を版 築する方法と、地山部を整形し段を削り出す方法がある。南四国では両者が認められるが、地山 整形の技法を採るものが多い。当遺跡の円形住居址ではST3が削り出し法、ST1・6が版築法に よっている。ベッドの形態はST3・6が壁面に沿って巡っているのに対し、ST1は六角形に巡 り、住居址の平面プランとは異なっており他の類例と比較しても特殊な形態と言えよう。これら 3棟の円形住居址の床面中央部には炉跡と考えられる中央ピットが付属しているが、ST1・6は中 心より南側に寄っている。高知平野の場合、弥生時代後期後半までは中央ピットが床面中央部に 位置しているが、時期が新しくなるにつれて南側に片寄る傾向が認められる。(13) 本例も同様な 傾向を有している。また中央ピットの平面形が円形から楕円形に変化するのも当該期の一般的な 特徴である。これらの竪穴住居を支える主柱穴は、ST1においてはベッド部コーナーに6個認め られるが、ST3・6については、SD2に切られていることもあって明確にすることかできない。

方形住居址は円形住居址に比べて全体的に小規模である。特に ST2 においてその傾向が著しい。 $ST4 \cdot 5$ は方形のベッド部を有している。 ST4 のベッド部は北隅で段部が不明瞭となっており、構築技法は東側版築、西側は地山成形である。この技法は松ノ木遺跡 ST1 に類例が見られる。 (14) また ST5 の東北壁沿いと ST4 の各壁沿いには壁溝が巡っている。

ベッド状遺構については、祭場説・寝床説など諸説があるが、当遺跡や南四国における一般的傾向としては、ベッド構造を有する住居跡が集落内において特別な位置を占めていたと考えられるような状況証拠は認められない。出土遺物もベッドを持つ住居址から祭祀行為を示唆するようなものは認められない。当遺跡においても時期を接する6棟中の5棟までにベッド状遺構が存在するという事実は、この種の竪穴住居を弥生時代末から古墳時代初頭にかけての一般的な形態として理解するべきであろう。

第 4 表 南四国におけるベッド状遺構を伴う住居址 (※は推定)

								т.	1
	遺跡名	形態	面積 (m)	ベッド部形態	ベッド幅 (m)	底面から の高さ (cm)	構築技法	所属時期	出土遺物 他
	Al	方形	₩33	コの地状又は全周	0.4~1.6	20	地山成形	古墳初期	ヒビノキ III
ひび	B1	円形	63.6	※全周	0.8~1.0	15	*	弥生後期	ヒビノキI・Ⅱ
のき	B2	隅丸方形	* 36	2面は確認	0.8~1.2	35	*	"	ヒビノキ [[
	D1	"	*42	,	0.7	30	*	"	"
林田	ST2	不整円形	63.5	三日月状に2面	最大0.8	10	*	,	〃 · 釶·鉄鏃
	Loc34A ST14	楕円	*58	三日月状に1面	最大1.4	40	*	"	勾玉、鉄鏃
旧村	Loc36B ST1	円形	24.6	,	最大0.5	15	"	"	
遺跡群	Loc45 ST1	*	31	全周	0.3~0.9	10	*	,	
	田中地区ST5	*	36.3	※全周	0.3~0.6	5~20	,	,	
7	STI	隅丸方形	% 13.8	コの字状又は全周	0.81~0.98	4~6	,	,	
びの	ST3	"	29.27	全周	0.66~1.1	2~12	,	,	中央 P が南寄
きサ	ST8	隅丸長方形	17.02	2面	1.25~1.35	11~17	"	,	阿波系搬入甕
ウジ	ST5	※隅丸長方形	29.9	2面	0.95~1.52	6~10	*	古墳初期	中央Pが南寄、小型丸底
	ST2	※隅丸方形	% 36	コの字状	1.0~1.4	10	版築	,	畿内系搬入臺
西分增	ST5	隅丸方形	※29.16	コの字状又は全周	0.9~1.2	15	*	,	*
増井	ST7	円形	50.2	全周	0.6~1.0	5	地山成形	,	
	ST10	不整隅丸方形	23.04	コの字状	1.0~2.0	5~10	版築	,	中央 P が南寄
松	STI	隅丸方形	25	全周	1.0~1.2	10~15	地山成形+版築	弥生後期	中央 P が南寄
オ	ST3	*	47.45	"	1.1~1.9	10~17	版集	,	
金	STI	隅丸方形	28.09	"	0.55~1.08	17	地山成形	,	
地	T2	円形	22.9	コの字状又は全周	1.06	24	*	"	
	STI	円形	33.2	全周	0.3~1.1	5~15	版祭	"	ベッド部は六角形
稗	ST3	*	% 50	コの字状	1.0~1.8	30~40	地山成形	,	
	ST4	方形	25	,	0.8前後	5~8	地山成形+版集	"	古墳時代に入る可能性あり
地	ST5	*	20.3	全周	0.9~1.0	20	版築	弥生後期 ~古墳初期	
	ST6	円形	56.7	*	1.0~1.2	15	"	弥生後期	
									(4) (11)

(4) ~ (11)

2.遺物

比較的まとまった遺物を出土したST3出土遺物を中心にまとめてみる。ST3出土弥生土器の割合は甕:壺:鉢:高杯:その他=10:6:4:3:1であり、甕が多数を占める。甕は在地系の甕の中に、明らかに在地甕とは異なる搬入土器が1点含まれる。在地甕は例外なく口縁部が「く」の字状に外反し、胴部は多く長胴砲弾型が推定される。胴部外面は叩きあるいは叩いた後ハケで消しており、内面のヘラ削りは全く認められない。底部は平底も残るが、突出した小さな平底から丸底を指向している。これに対して搬入土器は口縁部のみの出土ではあるが、土器製作技法が在地の土器には認められないものである。すなわち、口縁端部を上方へ摘み上げ、内面に横方向のハケ調整を施している。胎土良く引き締まり、在地土器か大粒の砂粒を含むのに対して、角閃石及び雲母片を含んで濃褐色に発色している。河内地域からの搬入品である。

壺は広口壺で占められており、口縁部に装飾を施す例(40~42)が見られる。鉢は小型で半球 形の椀状を呈するものと浅い皿状のものが大部分を占める。

先学により、南四国の弥生時代後期土器は7期に編年されているが、(is) ST3は後期7期に当てはめることができよう。

土器以外に注目できる遺物として、鉄器が出土している。ST3からは6本の鉄鏃茎部、またST5からは穂摘具と鉄鏃・鉄鏃茎部が出土している。鉄鏃は南四国においては弥生時代中期に出現し、(16) 後期に至り各集落間に普及して行く。鉄製穂摘具は北部九州地域からの出土例が知られているが、(17) 該当期の定形品としては県下はじめての出土であり、ST3から打製の石庖丁4点が出土していることと考え合わせ興味深い。

註

- (1) 香我美町教育委員会 『香我美町史 上巻』S60
- (2) 岡本健児 『日本の古代遺跡・39 高知』 保育社 H1
- (3) 高橋啓明·出原恵三 「下分遠崎遺跡 I 」 香我美町教育委員会 1989
- (4) 宅間一之·山本哲也·森田尚宏 【林田遺跡】 土佐山田町教育委員会 1985
- (5) 岡本健児・廣田典夫 「ひびのき遺跡」 / S52
- (6) 高知県教育委員会 「田村遺跡群」第4·5分冊 1986
- (7) 高橋啓明 「ひびのきサウジ遺跡」 土佐山田町教育委員会 1990
- (8) 出原恵三 「西分増井遺跡群」 春野町教育委員会 1990
- (9) 〃 「松ノ木遺跡 Ⅱ」 本山町教育委員会 1992
- (10) 吉原達生 『金地遺跡』 南国市教育委員会 1992
- (11) 出原恵三 【田村遺跡群-田中地区-】 高知県教育委員会 1986
- (12) 福岡県教育委員会 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XIX」 1977
- (13) (7) に同じ
- (14) (9) に同じ
- (15) 出原恵三 「土佐の弥生後期土器編年」「瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性」 古代学協会四国支部第4回大会発表資料 1990
- (16) 高知県香美郡野市町所在の野市本村遺跡から1992年に出土している。
- (17) 寺沢知子 「道具と技術 I 鉄製穂摘具-| 「弥生文化の研究5」 雄山閣 1989

(第1表)

				遺物観祭表	(第1表)
挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 器高 (cm) 胴径 底径	指土·色 <i>周</i>	特做	僚 考
4 - 1	ST 1	ŵ.	13.4 (2.5)	0.5~2 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	□預部はラッパ状に強く外反する。□唇部は外 傾する面をなし上に横み上げる。内外面共ナデ 調整。	
* - 2	"	*	15.0 (4.9) — —	0.5〜 3 mm の砂粒を含む 橙色	口核部ラッパ状に外反して端部は上下に肥厚する。口軽部は面をなし凹む。口軽部及び口核端 部はナデ調整頭部外面は右下がりのハケ調整、 内面は横方向のハケ調整。	
* - 3	*	,	21.4 (2.3) —	0.5〜3 mm の砂粒を含む 橙色	口検部ラッパ状に外反して端部は上下に肥厚する。口核部は前をなし僅かに凹む。口特部及び 口線端部は横ナデ。外面縦ハケ、内面横ハケ調整。	
» — 4	*	7	21.9 (2.7) –	05~1mmの砂板を含むが少ない 外面にぶい橙色 内面浅黄橙色	□頭部ラッパ状に強く外反する。□軽部は僅か に上下に拡張され面をなし、ナデ調繁の後貝殻 腹材による後い押引文を巡らす。外面ナデ、内 面は「撃なハケ調整を施す。	
v = 5	*	*	25.0 (2.2) - -	0.5〜2 mm の移植を含むが少ない 内外面浅黄 橙色 断面 掲灰色 焼成良好	口種部ラッパ状に強く外反する。口軽部上下に 拡張し貝鼓腹縁による支種を巡らす。外面は右 トリのハケ調整、内面横ハケ一部ヘラ発き。	
√ − 6	7	4	24.0 (2.1) - -	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 橙色	□縁都直線上に外方に関く。□将部は外頼する 面をなし上下に拡張し液状文を施す。条線は3 条、内外面ハケ調整。	1/4 剥離している
» — 7	7	ŝķ	12.0 6.0 - 1.8	0.5~ 5 mm の砂粒を含む にぶい橙色	丸底から内消して立ちあがり、口唇部は僅かに 内類して面をなす。外面人念なナデ調整、内面 右下りのハケ調整。指頭圧痕を認める。	黑斑有
» — 8	7	*	13.5 7.2 –	0.5~4 mm の砂粒を含む 没黄橙色	丸派から内湾して立ち上がり、口標部はやや内 頼する。口軽部は重をなす。外面ナデ、内面ハ ケ調整。指頭圧痕を認める。	-
» — 9	*	*	19.0 9.8 - 4.6	0.5~ 3 mm の砂粒を多く合む にぶい 黄橙色	平底から内沸して立ちあがり口縁着部は僅かに 肥厚して口縁部は外帽し面をなす。外面ナデ酒 繁、湖部にハケ目乗を残す。内面上半右下りの ハケ凋繁、下半ナデ凋繁。 底部に指頭圧痕。	
» — 10	*	*	18.4 (7.2)	1〜3mmの修覧を含むが少ない 黄灰色	内海気味に立ちあがり口軽部は充くおきめる。 外巾横方向の太い叩き調繁。内面ハケ凋繁。	
	*	*	17,4 (3.5) -	0.5~3 mm の砂粒を含む 灰白色	日縁部内湾し口唇部はほぼ水平の面を持つ。外 面ハケ調整。内面右下がりのハケ調整。	
	*	*	22.2 (3.5)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	口縁部僅かに肥厚し口軽部は外類して面をなす。 外面ナデ、内面右下りのハケ調整。	果斑有
→ −13	9	更	- - -	0.5~2 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 外面灰褐色 内面にぶい橙色	口标部外反し端部像かに外方に肥厚して口軽部 は面をなす。外面右下りの丁寧なハケ凋整、内 面ハケ凋撃後ナデ。指面圧痕を認める。	外面煤ける
5 - 14	,	底部	(2.0) -	0.5~2 mm の砂粒を含む 外面灰白色 内面淡黄色	突出した平底から外反して立ちあがる。底部内 面に指剤圧痕を有す。	1/2黒斑
* -15	*	9	- (1.7) - 4.4	0.5~3 mm の砂粒を含む多い にぶい 橙色	突出した平底から上外方に立ちあがる。外面叩 き目行。内面指頭圧痕を認める。	
→ − 16	*	"	(2.4) - 3,4	0.5〜3 mm の砂粒を含む 灰白色	突出した平底から斜上外方に立ちあがる。内外 順具指頭によるナデ調整。	
	*	,	(2.3)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 外面に思い機色 内面機色 0.5~3 mm の砂粒を多く含む	係かに残る平底から内湾して立ちあがる。外面 叩き調整。内面指頭圧痰を残す。 上ば底状脈部から内湾して立ちあがる。内外面	下端に黒斑石
			(4,5) - 2.6	灰白色	共ナデ調整。成部内面は凹み底部は貼り付けて いる。	
→ − 19	.,,	"		0.5~2 mm の砂粒を含むが少ない にぶい 橙色	平底状底部から上外方に内海風味に立ちあがる。 外面縦及び右下りの叩き調整。内面指動による	黑斑有

(第2表)

				遵彻 觀祭表	•	第 2 表)
挿図番号	遺構番号	器積	口径 法量 器高 (cm) 胴径	胎上·色調	特 改	備 考
5 - 20	ST 1	底部	底径	外面灰褐色	展部から内湾気味に立ちあがる。内面叩き後縦	
*-21	*	*	8.0 - (6.9)	内面にぶい橙色 0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む	ハケ。内面縦方向のナデ調整。 丸底から内湾気味に立ちあがる。外面ハケ目痕 が残る。内面右下りのハケ調整、底部ヘラ状工	刺離・磨耗共に多い
			(0.9)	橙色	共によるナデ調整。	
» — 22	"	"	(4.7)	0.5〜3 mm の砂粒を含む 橙色	丸底と思われる。内外面ナデ調整。	
∥ − 23	"	,	(4.6)	0.5~2 mm の砂粒を含む 役色	丸底風底部をもつ。外面ナデ調整、内面ハケ調 整後ナデ調整。	
» — 24	*	,	(3.0)	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面黄灰色	平成をもつ。外面縦ハケ後一部ナデ調整。内面 指頭圧填右。	一部煤ける
→ - 25	,	"	3.0	内面淡黄色 0.5~10mm の砂粒を含む	平底をもつ。外面縦ハケ、内面指頭によるナデ	
			(3.9)	チャートを含む にぶい橙色	凋赘。	
» — 26	*	*	(4.1) - 5.0	0.5~2 mm の移粒を含む 角礫及びチャートを含む 外面にぶい黄橙色 内面灰白色	平底から立ちあがる。外面細い凝ハケ、内面ナ デ調整。指頭圧痕を認める。	黑斑有
» — 27	*	*	-	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面橙色	平底から内湾気味に立ちあがる。内面指頭によるナデ調整。	磨耗激しい
6 -28	ST 2	苍	(3.4)	内面明褐色 外面浅黄橙色 内面灰白色	平底底部から内湾気味に立ちあがる。内外面共 ナデ調整、内面一部ペラ終き。	磨耗激しい
v – 29	"	"	(2.3) -	砂粒を含むが少ない 外面灰白色 内面ににぶい黄橙色	高台風底部をもち底部は貼り付けている。内外 面共ナデ調整。	一部煤ける
» — 30	"	斃	6.0 11.8 (4.7)	機成良好 砂粒を含むが少ない にぶい橙色	口検部内面に後をなして「く」の字状に外反し 口唇部は丸くおさめる。口縁部外面ナデ、内面 ハケ凋繁。胴部外面横方向の叩き凋繁、内面ナ デ凋繁。	外面煤ける
» — 31	"	*	(8.7)	0.5~ 3 mm の砂粒を含む チャートを含む 橙色	・	
» -32	,	*	- (5.5) - 5.8	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 灰黄色	平底から内湾気味に立ちあがる。内外面共ナデ 調整。	
≈ −33	"	鉢	10.0 (6.5)	細砂粒を含むが少ない 外面にぶい橙色 内面灰褐色	口縁部内湾し口軽部は丸くおさめる。全体ナデ 調整を施す。	
v - 34	"	*	18.0 (2.7)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む にぶい 黄橙色	口縁部僅かに内湾し口唇部は内頼して而をなす。 外面ナデ講整、内面ハケ講整後縦方向のヘラ磨 き。	
» — 35	*	*	23.8 (3.5)	0.5~1 mm の砂粒を含む 外面浅黄橙色 内面淡赤橙色	ロ は	磨耗激しい
7 – 37	ST 3	軣	19.6 (2.2)	0.5~2 mm の砂粒を含む 角閃石・雲母片を含む 漁場色	口縁部ラッパ状に外反し端部は上方へ摘み上げ る。外面横ナア・内面横ハケ調整。	搬入品
» — 38	*	Š	21.2 (4.5) - -	0.5~5 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面浅黄橙色 内面灰白色	口縁部ラッベ鉄に外風し端部は上下に僅かに肥 厚する。外面右下りのハケ調整、上端部は横ハ ケ後横ナデ。内面右下りハケ調整、上端部は 横ナデ。	
» — 39	*	*	24.0 (3.1) —	砂粒を含むが少ない 外面浅黄橙色 内面橙色	回縁第ラッパ状に外反し端部は下に拡張し口唇 部は重髪なす。外面右下りのハケ調整、内面ナ デ調整。	
⋄ −40	*	"	20.0 (1.2) —	0.5~3 mm の砂粒を含む にぶい橙色	水平に近く外反する口縁部を持つと思われる。 口唇部外傾する拡張された面をなし波状文を施 す。条線は3条。全体ナデ調整。	
√ −4]	*	7	20.0 (2.2)	にぶい橙色	口頭部漏斗状に外反すると思われる。口縁業部 は上下に門み口唇部は外傾する面をなし、中央 で交差する浅い鋸歯女を配す。外面右下りのハ	
			-		ケ調整、内面橋ナデ。	

(第3表)

				遵彻観祭表	(弟 3 表)
挿図番号	遺構番号	器 任	11径 法量 器高 (cm) 胴径 底径	胎士・色週	特 微	備考
7 - 42	ST 3	查	26.2 (1.8) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む 浅黄橙色	口域部ラッパ状に外反して口唇部は外傾した面をなし上下の振幅の狭い液状文を施す。条線は 2~3条。外面右下りのハケ調整、内面横ナデ 調整。	
» -43	"	,	25.0 (2.3)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	口曝部ラッパ条に外反し端部は拡張し口軽部は 面をなす。外面左下りのハケ、内面ナデ調整を 施す。	制能が激しい
8 – 44	*	"	12,8 (5.3)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む チャートを含む にぶい黄橙色	口縁部ゆるやかに外反しながら立ちあがり口軽 部は面をなす。外面縦ハケ、内面右下りのハケ 調整。	
<i>n</i> − 45	,	底部	(3,2) -	0.5〜2 mm の砂粒を含む 淡黄色	平底から内汚気味に立ちあがる。外面縦ハケ、 内面ナデ調整を施す。	黑斑有
* -46	*	:år	4.6 - (5.7) - 5.0	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む にぶい黄橙色	丸底風底部から内汚して立ちあがる。外面右下 りのハケ凋整、内面ナデ凋整。底部外面を叩い ている。	思避有
» — 47	*	底部	(2.6)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 外面にぶい黄橙色 内面灰色	平底から終上外方に立ちあがる。外面縦ハケ、 内面ナデ調整を施す。	
v - 48	7	,	(2.3) - 4.5	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 灰白色	僅かに突出した平底から内清して立ちあがる。 外面左下りの螺旋状叩き目を残す。内面構及び 左ドりのハケ調整を施す。	黒遮布
→ −49	4	ž	(2.7)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 黄褐色 焼成良好	丸底から内膚して立ち上がる。器壁はやや薄い。 外面下撃なナデ調整、内面もナデ調整を絶す。 と5~8mm、幅0.5~1mm の爪形加工税を20数 本後す。	
» — 50	4	亳	16.6 (3.4) —	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい橙色 内面灰色	口域部ゆるく外反し口軽部は外形する面をなす。 口軽部を外方へ指で摘む、外面縦ハケ、内面 右下りのハケ調整を施す。	
÷ −51	4	*	16.4 (7.0)	0.5~3 mm の砂粒を含む 浅黄橙色	口域部「く」の宇状に外反し口軽部は 丸くおさ める。口様部外面右下りのハケ凋整、 廃部外面 左下りの叩き凋整。内面は横ナデ。 胴部上半に 2ヶ所の粘土接合帯を認める。	
» −52	4	*	20.0 (7.0) –	0.5~3 mm の砂粒を含む 外面にぶい橙色 内面浅黄橙色	口嫌部「く」の字状に外反し端部は僅かに肥厚 して口軽部は面をなす。外面右下り及び縦方向 のハケ凋整。内面右下りのハケ凋整後一部ナデ。	
» — 53	4	"	22.3 (8.5) —	0.5~3 mm の砂粒を多く合む 橙色		磨耗激しい
√ − 54	4	"	(6.0) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む 浅黄橙色	口縁部「く」の字状に外反し口軽部は丸くおさ める。外面横方向の叩き調整。刷部に一部ハケ 調整。口縁部内面右下りのハケ調整。刷部内面 はナデ。	磨耗している
√ − 55	"	*	16.0 (5.0) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む 灰白色	□域部 〈」の字状に外反し口唇部は外領する 面をなす。□縁部外面右下りのハケ調整。胴部 横方向の叩き。□縁部内面は横ハケ調整。類部 に指頭圧痕を認める。	
√ −56	"	*	18.0 (12.5) —	0.5〜2 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄橙色	胸部内汚し口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁部は外傾して面をなす。口縁部外面は縦ハ ケ、胴部は横方向の叩き調整後縦ハケ両整。 以縁部内面は横ハケ、胸部は指頭によるナデ調整。 郷部及び胸部上半に粘土接合帯を認める。	
% − 57	"	*	16.8 (5.2) - -	0.5〜2 mm の砂粒を含む 浅黄橙色	口域部「く」の字状に外反し口唇部は僅かに肥 厚し面をなす。口域部外面は右下りの入会なハ ケ調整、刷部に横方向の叩き目。口縁部内面は 右下りのハケ調整。胴部は大デ調整。	
√ −58	"	"	18.6 (6.1) - -	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 没黄橙色	口縁部[く]の字状に外反し類部内面に枝をなす。 口号部は外傾し面をなす。口縁部外面はナデ調整。 刷がは四声割整後ナデている。内面は右下りの ハケ調整。類部に粘土核合帯が顕著である。	
» — 59	"	"	20.0 (5.4) —	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 灰白色	内薄した胴部から口縁部は斜上外方に屈曲して いる。口軽部は外傾した面をなす。外面に叩き 目裏有。胴部内面一部にハケ目痕を残す。	一部煤ける 磨耗が激しい
» -60	,	底部	(3.5) - 3.2	0.5~2 mm の砂粒を含む 外面浅黄橙色 内面にぶい橙色	突出した平底から上外方に立ちあがる。内外面 共ナデ調繁。底部内面が V 字状に凹む。	黑斑有
ø -61	"	,	(4.3)	0.5~3 mm の砂粒を含む 橙色	突出した平底から内湾気味に立ちあがる。外面 丁寧なナデ調整。下端に指頭圧痕を残す。内面 は右から左への荒い螺旋状ハケ調整を施す。	黒斑布

(第4表)

				夏彻 餀祭表		(第4表)
播図番号	遺構番号	2S fr.	口径 法量 器高 (cm) 脱径	抬主 一色週	等 做	编 考
,,,,,,			底径	4112.		, ,
8 -62	ST3	族部	(2.1)	0.5〜3 mm の砂粒を含む チャートを含む 淡黄色	突出した平底から上外方に立ちあがる。外面ハ ケ調整痕を残す。内面ハケ及びナデ調整。	
* -63	,	,	4.9 - (2.8)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む 外面浅黄橙色 内面灰色	突出した平底から内湾気味に立ちあがる。内外 面共ナデ調整。	黑斑有
			2.4			
<i>n</i> − 64	"	"	(2.5)	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 灰白色	実成風底部から内海気味に立ちあがる。外面ナ デ調整。内面右下りのハケ調整。底部は内面に 指頭圧痕を残す。	
* -65	,	手握士器	(2.0)	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 灰白色	外面ハケ調整模を残す。内面指頭圧痕が顕著で ある。	黑斑有
» —66	"	底部	(4.7)	の.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	平底から内湾気味に立ちあがる。内外面共観察 不能。	磨耗激しい
<i>⋄</i> −67	"	*	2.6 - (5.0)	0.5〜 2 mm の砂粒を含む 橙色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面騒及び右 下りのハケ調整。内面ナデ調整。	
√ − 68	"	*	3.0	0.5~ 3 mm の砂粒を多く含む	平底から内透頻味に立ち上がる。外面縦ハケ調	
			(3.9)	外面灰白色 内面灰色	整。内面指案短線が顕著である。	
→ −69	"	*	(5.4)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 外面にぶい黄橙色 内面略オリーブ灰色	丸族から陸湾実際に立ちあがる。外面ハケ。創整 東を残す。内面指摘によるナデ調整。	
→ −70	*	*	(6.2) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい黄橙色 内面灰色	丸咲から内湾気味に立ち上がる。外面叩き講像 一部後でナデている。内面ナデ講教。	無避布
→ −71	*	,	(4.0) - 3.2	0.5~2 mm の砂粒を含む 外面灰白色 内面灰色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面縦八ケ調整、底部叩いている。内面指頭圧痕が顕著。	
* -72	*	鉢	7.4 6.3 —	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 外面 権色 内面灰白色	丸底から内湾して立ちあかり、口軽部は丸くお きめる。外面は縦及び右下りのハケ調整。内面 ナデ調整。	
<i>n</i> −73	*	,	10.0 6.7 – –	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい黄橙色 内面橙色	僚かに残る平底から上外方に直線的に立ちあかる。外面叩いた後ナデ消している。内面右下りの螺旋状ハケ凋乾。底部ナデている。	
√ − 74	*	"	10.2 6.1	0.5~2 mm の複糊を含む チャートを含む 浅黄色	(機参に突出した底部から内膚して立ちあがる。 に躊躇は内値して面をなす。外面上半は右下が りのナア、下半は左下りの叩き凋萎。内面は右 ドリのパを測整。底部はナデ凋零。	黑斑有
→ −75	*	*	20.0 (5.0)	0.5~1mm の砂粒を含む 淡黄色	口縁部線西震競楽に立ちあがり着部は僅かに肥 以して回転部線所はした面をなす。外面横方向 の叩き興難。府面右下りのハケ。調整を施す。	
9 – 76	*	"	15.0 9.4 —	0.5~3 mm の粉粒を多く含む 浅黄橙色	丸底から底礁して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。 舞画不定方向の荒いナデ 調整、内面は上 半が右下りのハケ調整、下半はナデ調整を施す。	
* - 77	*	"	(3.5) -	0.5〜3 mm の砂粒を含む チャートを含む 橙色	内膚気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。 外血ナデ講繁、内面は右下りのハケ調整。	
* - 78	,	,	12.4 6.2 —	0.5~2 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	鬼寒から高郷して立ち上がり、口唇部は内領し で顔かに衝撃なす。外面上半はナデ凋整、下半 短叩き調整。内面は右下りのハケ凋繁を焼す。	
√ − 79	*	,	12.0 6.2 - -	0.5〜3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄橙色	北震が応内部 にで立ちあがり、口管部は丸くお さめる。外面上半は右下りのハケ凋整痕を残し ド半はナデ凋整。内面上半は右下りのハケ凋整 下半はナデ凋整。	
» — 80	"	*	23.0 (6.5)	0.5〜2 mm の砂粒を含む 灰白色	口縁部内消し端部は慌かに肥厚する。 耐暑毒は 面をなし凹む。外面叩き調整後一部ナデている。 内面ハケ調整後ナデ調整を施す。	
√81	7	*	23.5 (6.5) —	0.5〜 2 mm の砂粒を含む にぶい橙色	口域部内湾し口軽部は外類する面をなす。外面 た下がりの叩き調整。内面右下りのハケ調整後 縦方向の細いヘラ磨きを痛す。	

(第5表)

				遺物觀祭表	(第5表)
挿図番号	遺構番号	器 秤	口径 法量 器高 (cm) 駅径 底径	胎土・色調	符 微	備考
9 -82	ST 3	高杯	(5.8) - -	細砂粒を含む 外面灰白色 内面浅黄橙色	立ち上がり部外面は核をなし口縁部は外反する。 口縁部外面は丁寧なナデ調整。立ち上がり部以 下に横ナデ。内面は不定方向のナデ調繁。立ち 上がり部に粘土接合帯を認める。	
» —83	"	,	(7.5) - -	細砂粒を含む 浅黄橙色	杯部は内消して立ちあがり半球形状を呈する。 杯部内外面は丁寧なヘラ将きを施す。脚部外面 銀水ケ後ヘラ将き、内面は横ハケ海の 外局に扱い左下りのヘラ状原体による調整療有。	
√ −84	*	*	(2.2) - 17.8	細砂粒を含む 明褐色 焼成良好 雲母片を微量含む	大きく裾が広がり4孔を穿つと思われる。外面 ナデ網整後、細いヘラ状工具で横方向に時文展 の調整を施す。内面ハケ調整後一部ナデ調整。	搬入品の可能性有
√ − 85	*	"	(6.8)	1~4 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 淡黄色	円柱状で胸握部は「ハ」の字状に外反する。杯 との接合部に指頭圧痕が残る。内面はナデ調整。	磨耗激しい
10-100	ST 4	₩	17.6 (4.4)	外面にぶい黄檀色 内面黄灰色	口縁部はラッパ状に外反して端部は上へ摘み上 げる。口軽部は面をなし左下りの凹線を周囲に 巡らす。	磨耗激しい
<i>≈</i> −101	"	*	(2.0)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 外面にぶい黄橙色 内面灰白色	丸底からゆるく上外方に立ちあがる。外面叩き 凋整痕を残す。	
» — 102	"	委	11.8 (3.6)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 橙色	□縁部「く」の字状に強く外及し□軽部は丸く おさめる。外面横ナデ、内面ナデ調整を施す。	
» — 103	"	*	10.4 (7.3) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む 外面浅黄橙色 内面灰白色	胴部内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状 にゆるく屈由して外反する。口唇器は外質した 面をなす。外面荒いナデ、下端に即き調整痕が 残る。口縁部内面は右下りのハケ調象、胴部内 面ナデ。	
» — 104	"	"	13.4 (9.6)	0.5~1 mm の砂粒を含む 外面にぶい橙色 内面褐灰色	口縁部「く」の字状に外反し口軽部は丸くおさ める。外面叩き調整の後ナデ消している。内面 上半ナデ調整。ド半ヘラ状原体によるナデ調整。	磨耗している
» — 105	*	*	18.6 (14.8) 23.0	0.5〜2 mm の砂粒を多く含む にぶい <u></u> 放	口縁部内面に検をなして「く」の字状に外反し口唇部は丸くおさめる。最大径を中位より上に有す。口縁部外面機ナデ、胴部外面左下りの大い叩き調整で一部後に軽ハケを絶す。口縁部内面横ナデ、胴部内面上半は右下りのハケ、下半上板方向の荒いハケ凋整で一部指ナデ。胴部上半に粘土接合帶が顕著である。	外面が一部煤ける
» — 106	"	底部	(8.7)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む 外面にぶい黄橙色 内面褐灰色	僅かに突出した丸底から内湾して立ち上がる。 外面不定方向の叩き調整後一部ナデ調整。内面 荒いナデ調整。指頭圧痕を残す。	黑斑有
→ -107	*	,	(4.0) - 4.2	0.5~3 mm の砂粒を含む 外面にぶい橙色 内面灰色	押し潰したような平底から斜上外方に立ちあがる。外面横方向の叩き調整。内面横ハケ、下端 には指頭圧痕が顕著である。	黑斑有
	"	*	(2.8) - 5.2	0.5 ~ 2 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	下端が左右に肥厚した高台風底部から上外方に 立ちあがる。外面ハケ、内面ナデ調整、指頭圧 痕を残す。	黑斑有
» — 109	*	*	(3.5)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 外面灰白色 内面灰色	平底から斜上外方に立ちあがる。外面横方向の 叩き調整後縦ハケで消している。内面横ハケ後 一部ナデ調整を施す。底部を叩いている。	
11-110	*	Æ	13.0 (5.0) - -	0.5~ 1 mm の砂粒を含む 粒色	球形の刷部から口縁部ゆるく外反して内面に検 を持つ。口軽部を上へ強く摘み上げる。口縁部 外面強い横ナデ、難部横方向のヘラ形き、胴部 は右トりのヘラ勝きを続す。内面は全体強い横 ナデ。	
» —111	"	鉢	8.0 (4.0) -	0.5~3 mm の砂粒を多く含む 外面橙色 内面浅黄橙色	網部内湾し口軽部は上方へ立ちあがる。口哲部 は上へ摘み上げ後をなす。内外面共ナデ調整。	
→ −112	*	*	17.2 10.1 — 2.4	0.5~5 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面橙色 内面にぷい黄橙色	停かに残る平底から内汚して立ちあがる。口唇 部は丸くおさめる。内外面共ナデ講整。	
» —113	*	*	34.8 (4.4)	0.5~ 2 mm の砂粒を含む 橙色	大型の鉢。口縁端部はやや立ち気味で口唇部は 丸くおさめる。外面強い横ナデ後右下りのヘラ 勝急。内面横ナデ縄繁を施す。	黑斑有
12-117	ST 5	,	12.2 (2.8)	細砂粒を含む 淡黄色	□解郷一旦弊坂した篠鹿産気味に立ちあがる。 □審郷は真く彩きめる。□¥縁船摘んで強い横ナ ア。内外面共指頭圧痕を認める。	
ø - J18	,	*	12.8 (3.0) - -	細砂粒を含む 浅黄橙色	体部一旦外方へ開いた後口縁部上方に立ちあが り、端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさ める。口縁部摘んで強い横ナデを施す。内外面 共に指頭圧痕が顕著である。	

				遺物観祭衣	,	界 0 衣)
挿図番号	遺構皆分	器種	口径 法量 器高 (cm) 關径 底径	船上、色溝	特 微	備考
12 - 119	ST 5	类	17.6 (2.6)	細砂粒を含む 濃褐色 角関石・雲母片を含む	口縁部「く」の字状に外反し端部を上に摘む。 口軽部は丸くおさめている。頭部内面に鋭い梭 をなす。全体丁寧なナデ講然。	一部煤ける 搬入品
	*	122	(3.8)	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む にぷい橙色	口縁部ラッパ状に外反し口軽部は外領して面を なす。口唇部横ナデ。外面やや右下りのハケ調 繁、内面ナデ調整。	
* - 121	"	,	- (12.0) 20.0	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい提色 内面灰色	丸成風旅部から内高してたちあがり珠形の駅部 を持つ。外面縦ハケ後へラ焼きを施す。内面上 塩はナデ調整。下半は構及び右下りのハケ調整 を施す。	黑斑有
<i>%</i> −122	"	煲	(13.2) 16.0 2.6	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む にぶい黄橙色	で成から内高して立ちあがる。外面縦ハケ凋撃。 内面上半は縦ハケ、ド半は右から左への横ハケ を掩す。	
<i>"</i> − 123	"	,	(5.2) - 3.2	0.5~2 mm の砂粒を含む 灰白色	平底から内恋気味に立ちあがる。外面横方向の 叩き調整後縦ハケ、内面縦方向のナデ調整を施 す。	黒斑有
13 – 124	,	手捏止器	4.2 5.6 - 4.3	外面灰白色 内面オリーブ黒色	平底の杯型手捏土器で口縁の一部が凹む。 内外面共に指頭圧模を認めるが特に外面に顕著である。 胴部下端を指頭で絞っている。	
	"	高杯	(5.1) - 11.4	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄橙色	興部「ハ」の字状に開き4 化を外から内に向かって穿つ。端部は丸くおさめる。外面核方向の叩き調整後流いナデ調整。一部に整型後粘土を貼付けている。内面ナデ調整。	剝離激しい
14-129	ST 6	從	26.0 (3.9)	0.5〜3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む にぶい橙色	口縁部ラッハ状に外反し端部は拡張して口唇部 は外領する面をなす。口縁端部は横ナデ。外面 右下りのハケ調整、内面横ハケ調整。	
» — 130	*	,	34.6 (3.1) -	0.5〜2mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	口縁部水平近く外反する。口唇部は外傾する幅 広い面をなし波状文を施す、条線は4条。 外面ナア調整。内面ナア調整、一部へラ磨き。	思題有
» — 131	"	底部	- (3.4) - 4.4	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	一方に歪み突出した平底から内湾して立ちあがる。外面ナデ調整、内面ハケ調整。底部外面に 木業の圧痕を残す。	
→ −132	"	*	(3.6) - 6.2	0.5~3 mm の砂粒を多く含む 外面程色 内面灰白色	広い平底から斜上外方に立ちあがる。外面ナデ 凋整、内面横ハケ凋整。	黑斑有
» — 133	"	"	(2.5) — 4.0	0.5~2 mm の砂粒を含む チャートを含む 浅黄橙色	平底から斜上外方に立ちあかる。外面ナデ。 内面ハケ調繁、一部後でナデている。	
» −134	*	"	- (1.9) -	0.5~2 mm の砂粒を含む 浅黄松色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面ナデ、内 面ハケ凋繁。	
	"	*	(5.4) - (5.0)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 外面灰白色 内面灰色	平底から内湾気味に上外方に立ちあかる。外面 叩き調整後ナデ消している。底部も叩いている。 内面右下りのナデ調整を施す。	
15-136	"	鉢	12.0 (3.9)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	丸底から内消して立ちあがる。口軽部は丸くお さめる。全体ナデ測整。	磨耗している
	"	"	16.8 6.6 —	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄橙色	丸底から内湾気味に立ちあがり口唇部は外傾し た面をなす。外面右下りのハケ調整。内面上半 はハケ調整、下半は指頭によるナデ調整。	
» — 138	"	,	25.0 (7.0) -	細砂粒を含むが少ない 浅黄橙色	内湾気味に立ちあがり口軽部は僅かに面をなす。 外面ナデ調整、下半にハケ調整痕を残す。内面 一部ハケ調整残るが全体ナデ調整。	
» −139	"	"	12.8 (5.6) -	細砂粒を含むが少ない 浅黄橙色	丸底から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くお さめる。全体ナデ調整を施す。	
» — 140	*	高杯	(6.0) - 15.2	0.5~2 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	裾が「ハ」の字状に開き纏部は内傾する面をな す。4孔を穿つと思われる。外面縦方向の丁家 なヘラ磨き、内面横ナアを摘す。	
→ −141	"	"	(3.8)	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 淡黄色	「ハ」の字状に張り出す脚部を有すると思われる。杯部と脚部の接合部に粘土帝を張り付けへ ラ状工具で押さえている。内外面共ナデ調整。	
16 – 142	SK 3	垄	11.7 10.5 — —	0.5〜3 mm の砂粒を含む にぶい橙色	丸底から胴が張らずに頸部に至る。屈曲部内面 は丸いところと稜をなすところがある。口縁部 まで叩き出し外面叩き後口縁部のみ騒ハケ。内 重右下り及び横位のハケ、底部建い指ナデ。	!!!斑有

(第7表)

				遺物観祭表		第7表)
挿図番号	遺構番号	器種	11径 法量 器高 (cm) 關径 底径	胎士・色調	\$5 8 8€	備考
16-143	SK 3	垄	12.2 13.8 12.7 2.2	0.5~4 mm の砂粒を多く含む 外面浅炭橙色 内面にぶい橙色	口機都「く」の字状に外反し内面に丸味のある 機をもつ。口唇部は比較的丁寧に面取る。口径 と観部最大径がほぼ同じ。開部外面叩き+縦ハ ケ、下半は叩きがすべてハケで消されている。 内面上半は右下りのハケ、下半はヘラ削り+ナデ。	
√ − 144	*	12.5	11.6 29.0 15.8	0.5~3 mm の検粒を多く含む チャートを含む 外面にぶい 樽色 内面 橙色	国面上中は相下りのハケ、十年は、川ケアケス 解電しているが実底から立ちあがり 以影の胴部 をもつ。強部はわずかに内湾気味に立ちあがり 日経部外面は丸味を帯び内面は角張る。口強部 外面は右下りのハケ調整後私下り及び機合のへ ラ恋き、駅部は縦及び右下りのハケ調整後縦及 び右下りの丁率なへラ感き。口強部内面は右下 りのハケ調整後縦のヘラ磨き。端部付近内外面 は整終段階で横ナデ。体部内面上半に粘土帯の 単位(編1.5~2.0cm)を明瞭に見ることができ る。下半はナデの下地に下から上へのヘラ削り のあった可能性大。	
√ − 145	"	鉢	12.6 (3.6)	0.5~3 mm の砂粒を含む チャートを含む 淡黄色	内湾して立ちあかり端部はほとんど未凋整。外 面ナデ凋整でヒビ劇れ状の亀裂が入る。内面右 下りの強いハケ凋整。	
→ −146	*	*	13.0 5.5 —	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 淡橙色	丸底から内湾して立ちあがり、中位から上が急 に薄くなる。外面縦ハケの上をナデている。内 面上半は右ぎりのハケ、下半はナデ調整。	
→ − 147	"	売	14.4 (4.2)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	口唇部を摘んで横にナデている。外面縦ハケ、 内面右下りのハケ調整を施す。	
→ − 148	"	idit	16.8 (2.4)	0.5〜3 mm の砂粒を含む チャートを含む 橙色	口縁端部は斜上外方に立ちあがる。口縁部に 粘上をつぎ足している。	
√ − 149	"	要	17.6 (3.0)	0.5~3 mm の砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄橙色	口縁部外反し端部は上に摘み上げて面取りして いる。内外面共強い模ナデ。下端部が擬口縁で 剝離している。	
» — 150	SK 1	上歸賢 上器 杯	11.8 4.0 —	細砂粒を含む 浅黄橙色	底部から斜上外方に立ちあがり口縁部は僅かに 外反する。口悸部は丸くおさめる。内外面共 ナデ調整、端部は横ナデ。指頭圧痕を認める。	
√ − 151	"	"	12.2 2.8 —	細砂粒を含む 浅黄橙色	口縁部僅かに段をもって外反し回縁離は丸くお さめる。内外而共ナデ調整、端部は摘んで強い 横ナデを腕す。外面に指頭圧痕が顕著である。	
→ −152	"	瓦質 鍋	(5.4)	細砂粒を含む 灰白色	内湾する胴部から口縁部はゆるく外反する。口 悸部は僅かに外傾して面をなす。全体横ナデ膚 鰹。	
» −153	"	瓦質 鍋·脚	(6.5)	細砂粒を多く含む 略灰色	腰面わずかに楕円を呈す。	全体煤ける
17 – 154 (1) (2)	Р7	存磁碗	16.6 7.2 6.0	柚の発色は暗育緑色	底部の器肉は厚く口縁部停かに外反し締部は丸 味をもっておさめる。高台は新面四角で高台部 侵付及びその内部は霧胎である。外面無文、内 面及び見込みに連華文を縮す。	
» — 155	"	土師質 土器 川	8.6 1.4 - 5.2	細砂粒を含む 橙色	底部から外反して立ちあがり口軽部は丸くおさめる。内外面共横ナデ調整を施す。底部外面は 回転糸切り。	
» — 156	P 5	瓦質	16.2 (7.0)	細砂粒を多く含む 淡黄色	内秀しながら立ちあがり口標部「く」の字状に 外長する。口軽部は外側する値をなし頭部内面 は丸味をもつ。内外共ナア調整。外面指頭圧痕 が顕著である。	
<i>№</i> - 157	Р6	高杯	(10.3)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 橙色	裾が「ハ」の字状に広がる脚部。外面丁寧なナ デ調整。内部縦穴が貫通している。	1/3剝離している
<i>></i> −158	SD 2	底部	(3.3)	0.5 ~ 1 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	突出した平底から斜上外方に立ちあがる。外 面積位の叩き調整、内面ハケ淵整。	黑斑有
v - 159	,	"	(2.3) - 4.2	細砂粒を含む 橙色	平底から内膚気味に立ちあがる。外面右下りの ハケ目痕を残す。内面ナア調整。	無斑有
» — 160	"	"	(6.3) - 7.0	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 外面浅遊燈色 内面灰白色	半底から内汚気味に斜上外方に立ちあがる。外面像力向の表い間多調整後一部縦ハケ。内面荒 いナデ、指頭圧緩が顕著である。	
√ − 161	*	*	(4.1)	0.5〜2mm の砂粒を含む チャートを含む 灰色	平底をもつ。外面散ハケ凋繁。底部を叩いてい る。内面ナデ凋繁。	黑斑石

(第8表)

				医物配示 致		(20 0 1)
播図番号	遺構番号	# ₩	口径 法量 器高 (cm) 關径 底径	胎士・色調	特 微	倫 考
17 162	SD 2	土師質 上器 杯	15.8 (3.0)	0.5~ 1 mm の砂粒を含む にぶい橙色	内湾して立ちあがり口縁部僅かに外反する。口 軽離は丸くおさめる。内外面共ナデ調整。	
» — 163	*	» 84	20.4 (5.4) - -	0.5~2 mm の砂粒を含む にぶい黄橙色	口様部ゆるく外反し口軽器は外傾した幅広い面をなす。外面右下りのハケ凋整、端部横ナデ。 口練部内面ハケ凋整。端部横ナデ。 利下りのハケ凋整を施す。	
	SD 3	疾部	(3.4) - 3.2	0.5~3 mm の砂粒を含む 浅黄橙色	優かに突出した平底をもつ。外面ナデ、内面へ ラナデー部ハケ調整。	
→ − 165	*	*	(3.5)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む にぶい橙色	突出した上げ底風底部。外面左下りの螺旋状中 き調整。内面ハケ調整を施す。	
» — 166	*	"	(3.1) - 4.7	0.5~3 mm の砂粒を多く含む 外面浅黄色 内面オリーブ黒色	上げ底風平底をもつ。内外面共へラ状工具によるナテ調繁。	
» — 167	"	,	(6.7)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 外面淡黄色 内面灰色	機かに残る率底から内汚して立ちあがる。内面 不定方向のハケ調整、一部ナデ調整。内面ナデ 調整。	
→ −168	*	高杯	(5.2)	0.5~1 mm の砂粒を含むが 少ない にぶい程色 焼成良好	口縁部大きく外反する。口縁端部は欠損している。内外面共ハケ凋撃の下地の上にヘラ磨きを 飾す。方向は外面上半右下り、頭部は横位、下 半は縦、内面は縦方向。	搬入品の可能性有
√ −169	"	瓦質 鍋	(4.2)	細砂粒を含む 灰色	口縁部ゆるやかに外反し口唇部は幅広い面をな す。全体ナデ調整。	
18 - 170	包含層	s&i	19.0 (3.7)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 浅黄橙色	口縁部ラッパ状に外反し口唇部僅かに内質する 面をなす。口唇部を飾っている。	磨耗激しい
√ − 171	*	"	26.8 (5.8)	0.5~2 mm の砂粒を多く含む 橙色	口縁部ラッパ状に強く外反し口唇部は外類した 面をなす。口唇部を飾っている。	磨耗激しい
√ − 172	*	九質 摺針	26.0 (4.8)	細砂粒を含む 灰色	[[縁端部横ハケ凋整。条線は3~4条。	

写 真 図 版



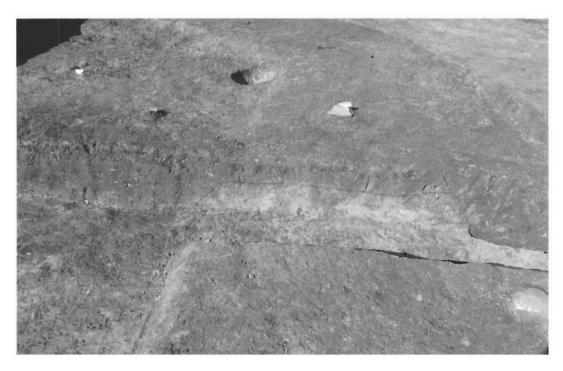
発掘調査区全景



発掘調査風景(ST4)



ST1完掘状態(東から)



ST1ベット部セクション (東から)

写真3



ST 2検出状態(東から)



ST3検出状態(東から)

写真4

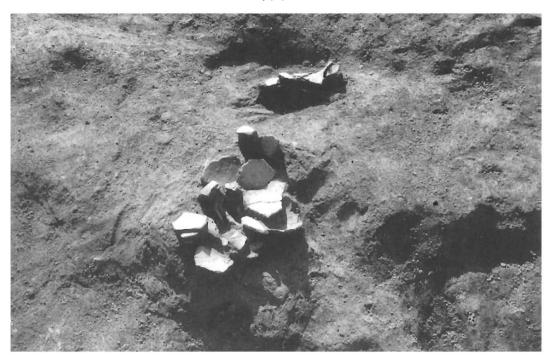


ST3完掘状態(東から)

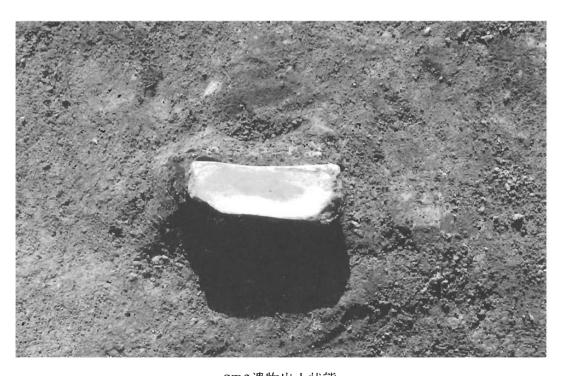


ST3内SD2セクション(東から)

写真 5



ST3遺物出土状態



ST3遺物出土状態

写真6

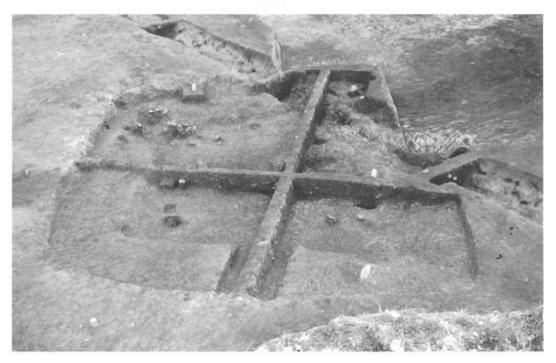


ST4完掘状態(南から)

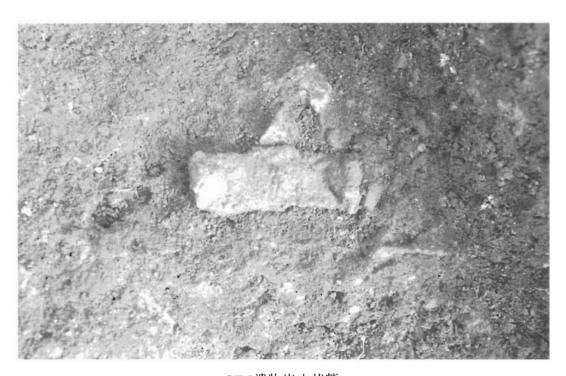


ST4遺物出土状態

写真 7



ST5完掘状態



ST5遺物出土状態

写真8



ST5遺物出土状態



ST5遺物出土状態



ST6完掘状態(西から)

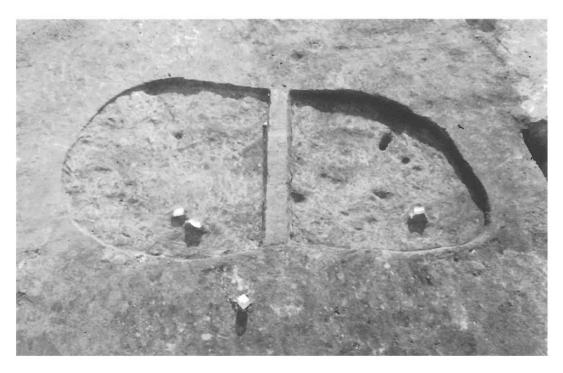


ST6北壁セクション

写真10

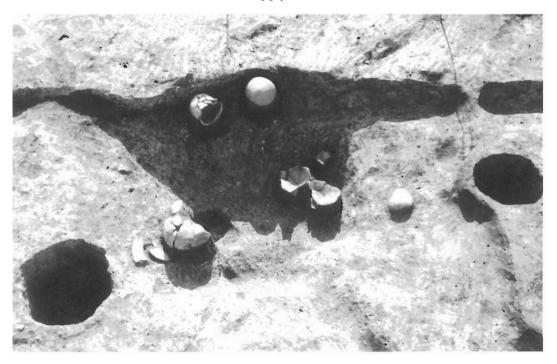


SD2東壁セクション(D7区)



SK 1完掘状態(北から)

写真11

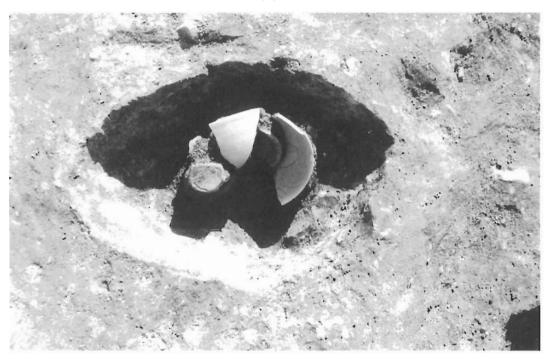


SK3遺物出土状態(北から)

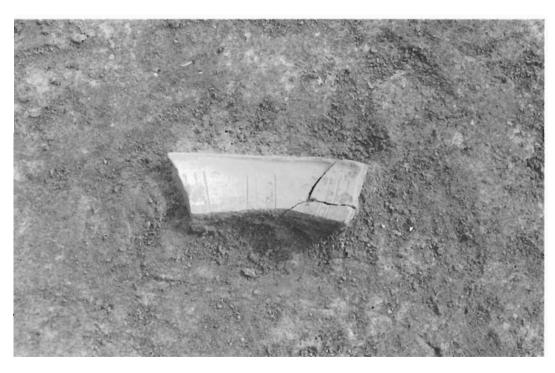


P5遺物出土状態

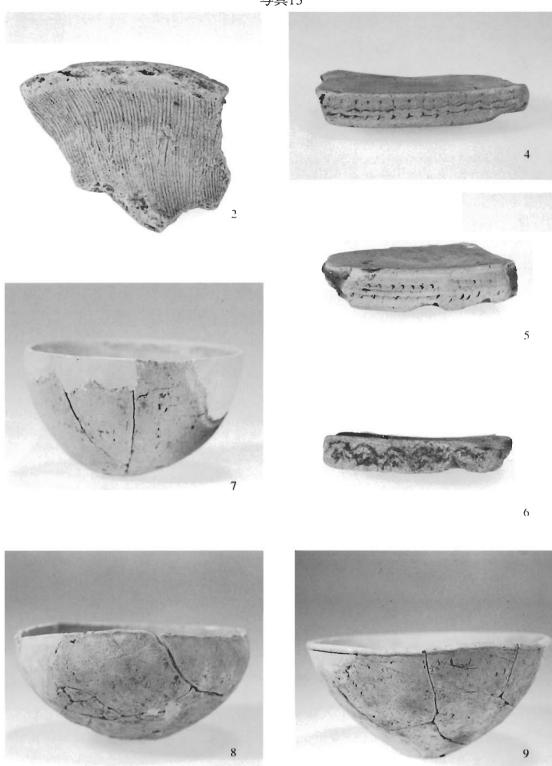
写真12



P7遺物出土状態

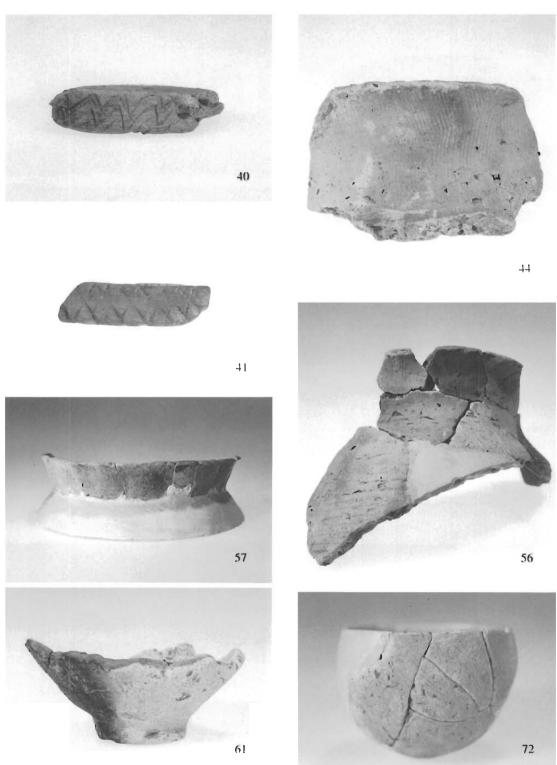


包含層遺物(172)出土状態



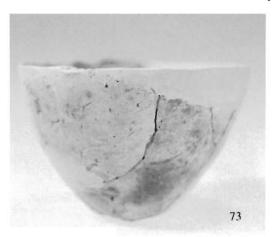
ST1出土遺物

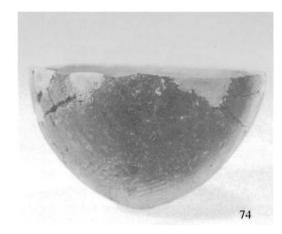
写真14



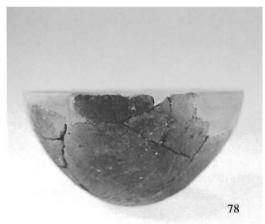
ST3出土遺物

写真15

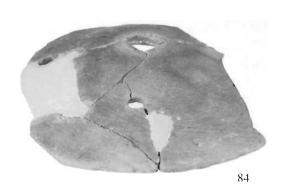






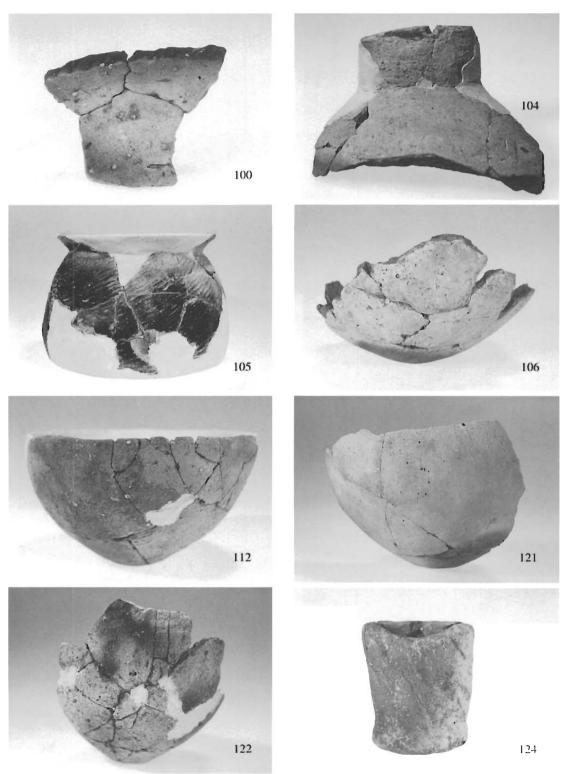






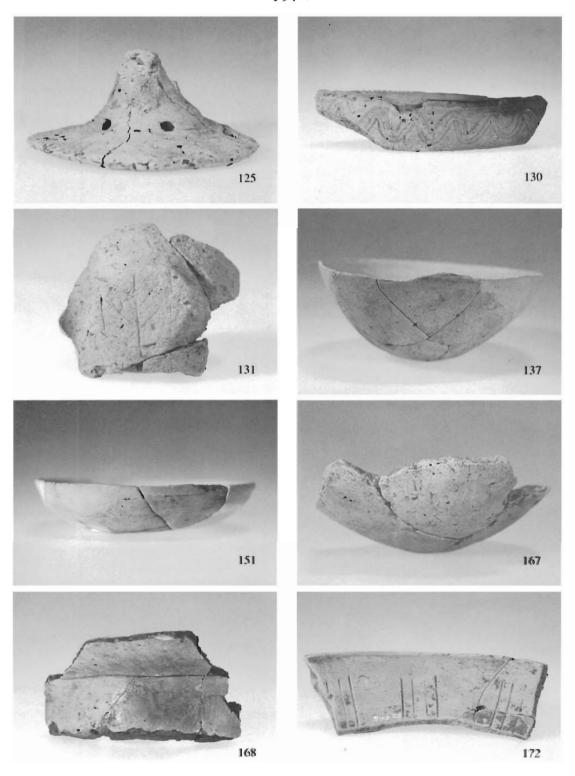
ST3出土遺物

写真16



ST4·5出土遺物

写真17

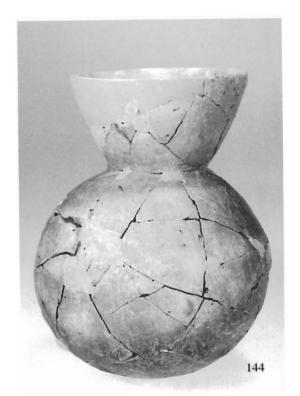


ST5·6、SK1、SD3、包含層出土遺物

写真18







SK3出土遺物

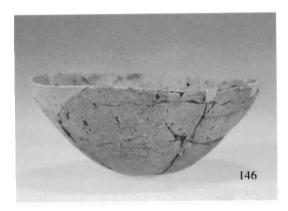
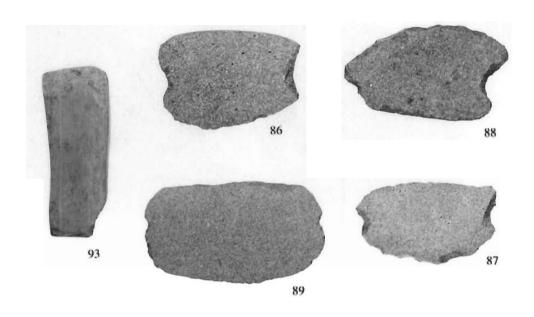


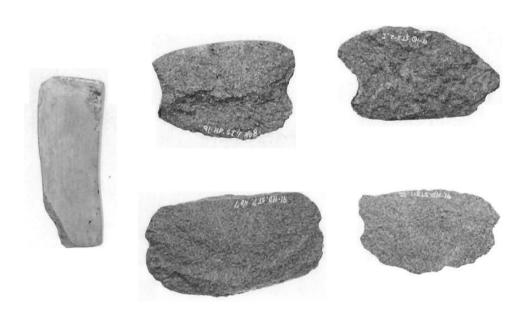
写真19





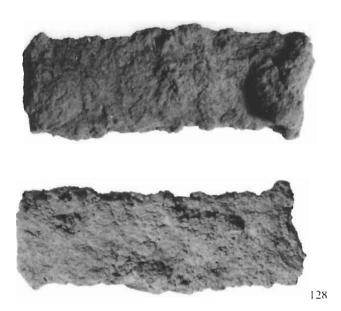
写真20



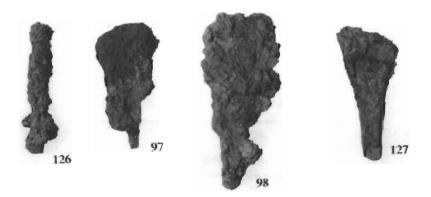


ST3出土石器(石包丁·砥石)

写真21







ST3·5出土鉄器(鉄製穂摘具·鉄鏃)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集

稗 地 遺 跡

—— 高知県香美郡香我美町 —

1993.3

発 行 財団法人 高知県文化財団 埋 蔵 文 化 財 センター

印刷 共和印刷株式会社